

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第268集

大里郡岡部町

大寄遺跡 I

岡部町西部工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

—II—

〈第2分冊〉

2000

岡 部 町

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目次

〈第1分冊〉

口 絵

発刊によせて

序

例 言

凡 例

目 次

I 発掘調査の概要	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	4
II 遺跡群の立地と環境	6
1. 地理的環境	6
2. 周辺の遺跡	8
III 遺跡群の概要	12
1. 遺跡群の概要	12
2. 大寄遺跡の概要	13
IV 大寄遺跡 I 区の遺構と遺物	16
1. I 区の概観	16
2. 縄文時代の遺構と遺物	27
(1) 竪穴住居跡	27
(2) 土壌	28
(3) グリッド出土縄文土器	32
(4) グリッド出土石器	37
3. 古代・中世の遺構と遺物	40
(1) 竪穴住居跡	40
(2) 掘立柱建物跡	263
(3) 溝跡	287
(4) 井戸跡	296
(5) 土壌	303
(6) 標列跡	329
(7) 性格不明遺構	331

(8) ビット・グリッド・表採出土遺物

(9) I 区出土鉄製品

〈第2分冊〉

V 大寄遺跡 II 区の遺構と遺物	339
1. II 区の概観	339
2. 縄文時代の遺構と遺物	347
(1) 竪穴住居跡	347
(2) 住居跡・グリッド出土遺物	348
3. 古代・中世の遺構と遺物	350
(1) 竪穴住居跡	350
(2) 掘立柱建物跡	492
(3) 溝跡	507
(4) 井戸跡	510
(5) 土壌	520
(6) 標列跡	533
(7) 土壌墓	534
(8) 性格不明遺構	536
(9) ビット・グリッド出土遺物	539
(10) II 区出土金属器	542
(11) 追加・訂正遺物	545

VI まとめ

1. 羽釜出現期以降の土器群について

附編

大寄遺跡出土土器の胎土分析鑑定報告

V 大寄遺跡Ⅱ区の遺構と遺物

1. Ⅱ区の概観

大寄遺跡Ⅱ区は、Ⅰ区の東方、保存区域を挟んで約50m隔たっている。東西約230m、南北185mの広大な調査区である。地形的にはⅠ区同様ほぼ平坦な台地上に位置する。標高は約53～54mで、西側から東側に向かって僅かに傾斜している。

調査区の南半には浅い埋没谷が入り、西南西から東北東に向けて抜けている。この低地部と北側にある台地部では、遺構分布の面からも大きな相違がある。調査区北半の高位面では極めて多数の遺構が稠密に分布し、対照的に南側の低地部では遺構分布は疎である。

検出された遺構は竪穴住居跡273軒、掘立柱建物跡76棟、井戸跡32基、溝跡38条、土壇196基、墓塚5基、柵列5条、性格不明遺構2基などである。

本書においてはⅡ区のうち、北西部を報告対象とする。残りの部分については来年度報告予定である。報告対象エリア内から検出された遺構は、竪穴住居跡123軒、掘立柱建物跡10棟、井戸跡32基、溝跡4条、土壇86基、土壇墓2基、柵列3条、性格不明遺構2基である。

遺跡の性格はⅠ区とはほぼ同様で、縄文時代前期、古墳時代後期から平安時代に至る集落、中世の遺構群からなる。但し、土壇の中に1基古墳時代中期のものがあつた。遺跡全体の様相に関しては、報告書の完結を待たねばならないが、ここでは本報告に関する部分に限定して遺構の分布、及び時期的な様相を概観しておきたい。

縄文時代の住居跡は3軒重複して検出された。遺存状態の良い第1号住居跡は長方形で、壁柱穴が巡る。前期関山期に属する。

古墳時代後期～平安時代の住居跡は120軒検出されている。最も古く位置づけられるのは、第57号住居跡と思われ、6世紀末葉～7世紀初頭段階である。コマドをコーナー部にもつ特異な住居跡である。ほぼ同一段階の可能性をもつ住居跡は2軒ある。7世紀前半

～後半にかけて住居件数は増加傾向にある。第14号住居跡は7世紀前半、第59・75号住居跡は7世紀前葉から中葉頃であろう。7世紀後半段階になると、第21・23・53・55号住居跡など大型の住居跡が目立つ。特に23号住居跡は長軸が9mを越える本遺跡最大の住居跡である。

8世紀前半では住居数は更に増加し、15軒前後になる。この段階に一つのピークがあるようだ。8世紀後半～9世紀前半にかけて次第に住居数が減少し、9世紀後半～10世紀初頭段階に再び増加に転ずる。10世紀前半段階の住居跡が明確に抽出できないため、10世紀後半との断絶があるようにも見えるが、一つの課題としておきたい。

10世紀後半以降の住居跡は30数軒を数え、大寄遺跡集落が最大規模に拡大した時期である。

掘立柱建物跡は10棟検出され、2×2間の倉庫状建物が5棟と3×2間の比較的小規模な副建物から構成される。竪穴住居跡数に比して掘立柱建物跡の数が少ない。次年度報告エリアには掘立柱建物跡が集中するブロックが認められ、ある時期、住居域と掘立柱建物跡域が分離していた可能性もあろう。

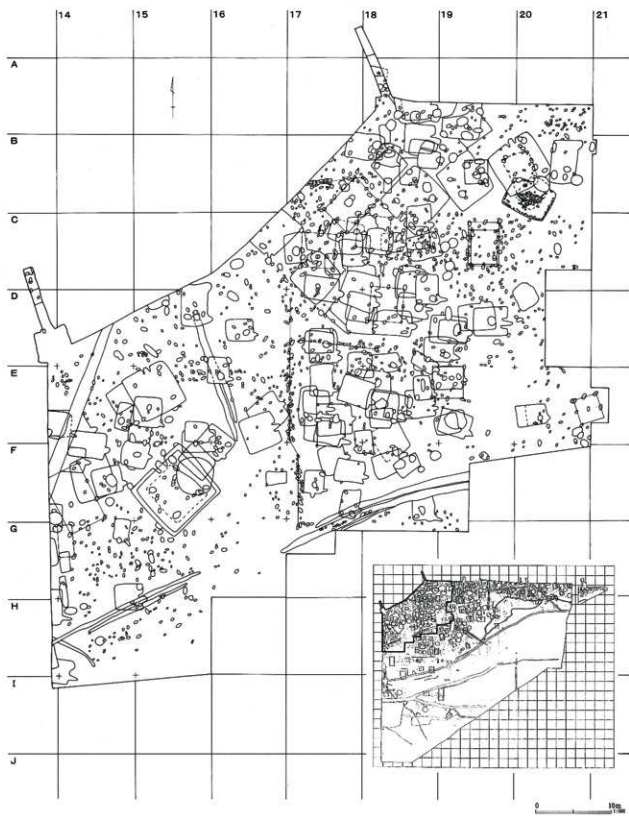
井戸跡は32基検出され、小型の井戸跡が大半を占める。このタイプは、出土土器からみて古墳時代～奈良時代にかけてつくられた可能性が高い。

柵列は3条検出された。相互に関連したものと思われ、10世紀後半以降の住居跡群の区画施設として機能していた可能性がある。

土壇墓は2基検出された。第56号住居跡と第118号住居跡の中に掘り込まれていた。Ⅰ区で検出されたものと同様、10世紀後半以降の住居跡を利用した廃屋墓と考えられる。

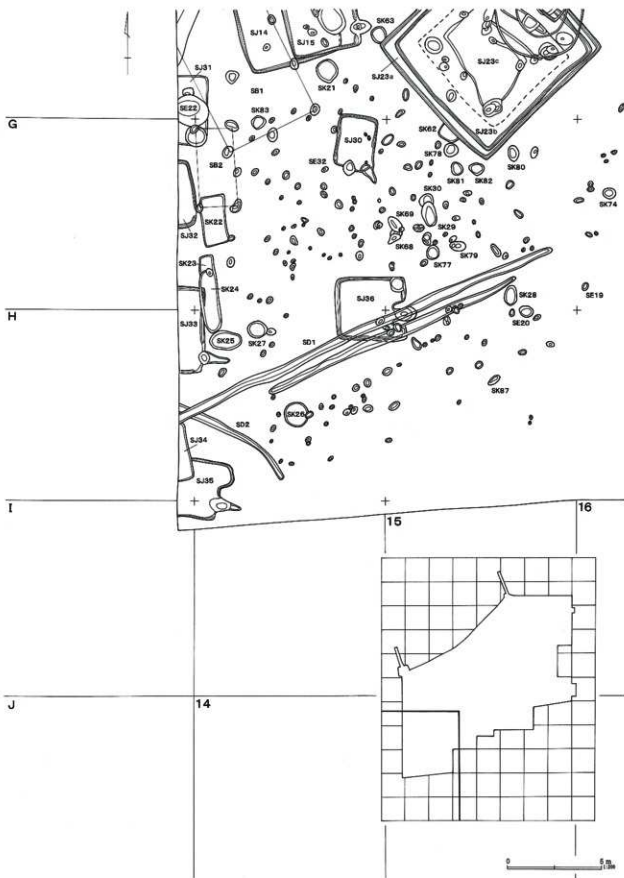
出土遺物は土師器・須恵器を主体とし、灰釉陶器、10世紀後半以降では羽釜、ロクロ土師器高台碗・小皿などから構成され、Ⅰ区の様相と同様である。

第250図 大寄遺跡Ⅱ区遺構配置図



大寄Ⅱ区

第254图 大寄遺跡Ⅱ区全測図(4)

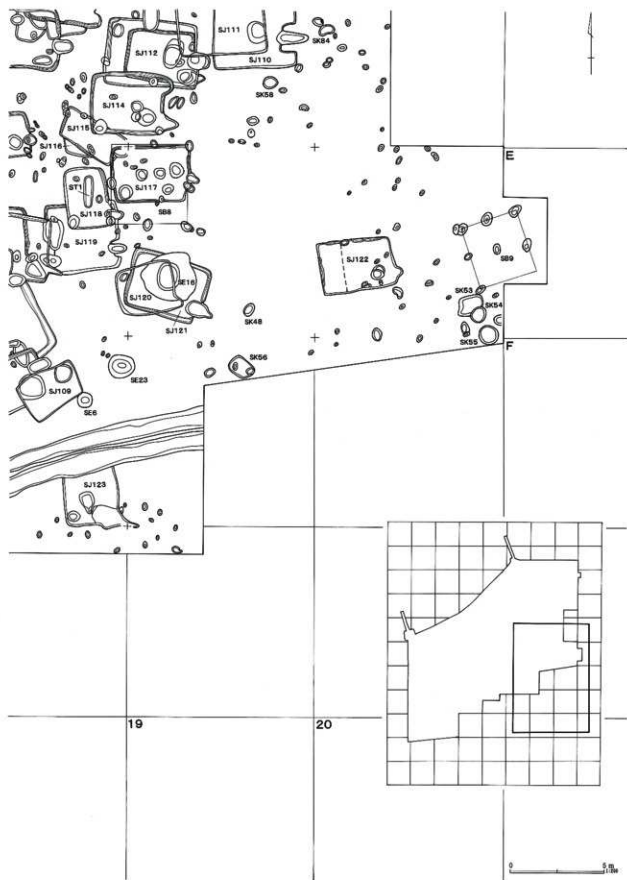


第255图 大寄遗址II区全测图(5)



大寄Ⅱ区

第256图 大寄遺跡Ⅱ区全測図(6)



2. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

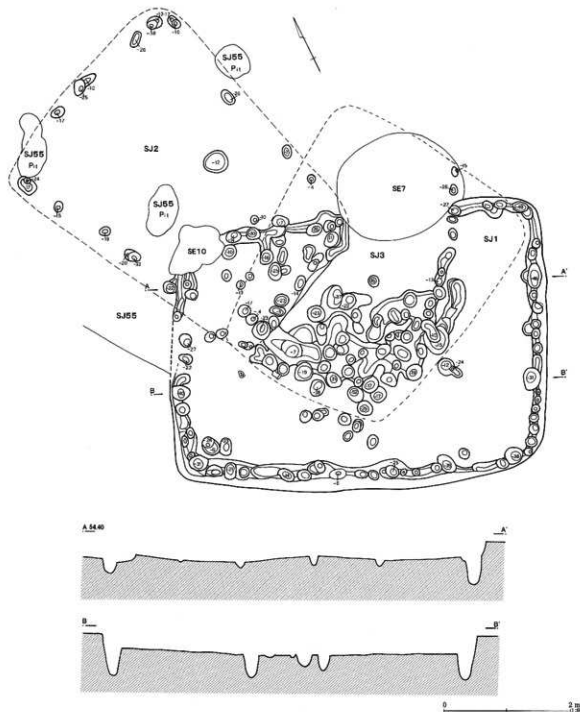
第1号住居跡 (第257図)

第1号住居跡は、B-19・20、C-20グリッドに位置する。第55号住居跡、第7・9号井戸跡に切られていたが、遺構の遺存状態は比較的良好であった。また、

重複する第2・3号住居跡は本住居跡床面精査段階で検出された。時期的には近接したものであろう。

平面形は長方形で、規模は長径6.00m、短径4.36m、深さ0.32mを測る。主軸方向はN-113°-Eを示す。

第257図 第1～3号住居跡



床面は概ね平坦である。炉跡は精査したものの検出されなかった。住居埋土はローム粒子を含む暗茶褐色土を基調としていた。

ピットは壁に沿って多数巡っており、壁柱穴と考えられる。床面中央付近のピット群は第2・3号住居跡のそれと重なって判別できない。

出土遺物は非常に少なく、覆土中より土器片が3点検出されたのみである(第258図1・2・5)。出土土器の文様構成から縄文前期前半、関山式段階の住居跡と考えられる。

第2号住居跡(第257図)

第2号住居跡は、B-19・20グリッドに位置する。第1号住居跡の床面精査段階で確認された。第55号住居跡の下層に位置し、第7・10号井戸跡にも切られており、遺構の遺存状態は悪い。

上面を削平されているために、規模・形態は不明確である。壁柱穴をもつ住居跡と考えられ、それによって住居規模や形態を推定した。

平面形は不整形あるいは台形に近い形態で、推定規模は長軸4.97m、短軸3.78mを測る。主軸方向は

N-28°-Wを示す。

床面は平坦である。埋土は暗茶褐色土で、第1号住居跡のそれと共通する。炉は検出されなかった。ピットは推定壁に沿って巡る。

出土遺物は検出されなかった。時期は不明確であるが、第1号住居跡と同様、縄文前期に属するであろう。

第3号住居跡(第257図)

第3号住居跡は、B-20グリッドに位置する。第1号住居跡床面を精査した段階で存在が確認された。第55号住居跡の下層にあり、第7号井戸跡に切られていた。3軒の住居跡の中では遺存状態は最も悪い。

平面形は不明確であるが、不整形あるいは台形になるであろう。推定規模は長軸4.20m、短軸3.38m、深さ0.35mを測る。

床面は平坦である。炉は検出されなかった。東壁部では壁柱穴風に小ピットが並ぶが全体としては不明確である。また、第1号住居跡との重複部にピットが密集するものの、帰属は不明確である。

出土遺物は検出されなかった。時期は縄文前期と思われるが、それ以上の限定はできない。

(2) 住居跡・グリッド出土遺物

II区出土縄文土器・石器(第258図1~15)

大寄遺跡II区からは、縄文時代の遺物が少量検出されている。I区の種類と合わせて記述していく。

第I群第1類土器(1~6)

前期前半の関山式土器で、いずれも付加条第2種巻きの異条斜縄文による羽状縄文が施文されるものと思われる。4は付加条の熱糸部分で格子目文を構成する。

第II群第3類土器(7~12)

中期終末の加曾利E式土器を一括する。7は口縁部文様帯を持つキャリバー系の土器の口縁部破片で、9はその胴部破片である。8は吉井城山系の口縁部破片で、口縁部の無文帯下の縄文地文上に、沈線の褶曲文を施文する。12は沈線区画内に単節縄文RLを充填施文する。10・11は条線文を施文する破片で、10は浅鉢と思われる。

石鏃(13)

黒曜石製で、先端部を欠損する。長さ1.55cm、幅1.35cm、厚さ0.4cm、重さ0.59gを測る。

石鏃(14)

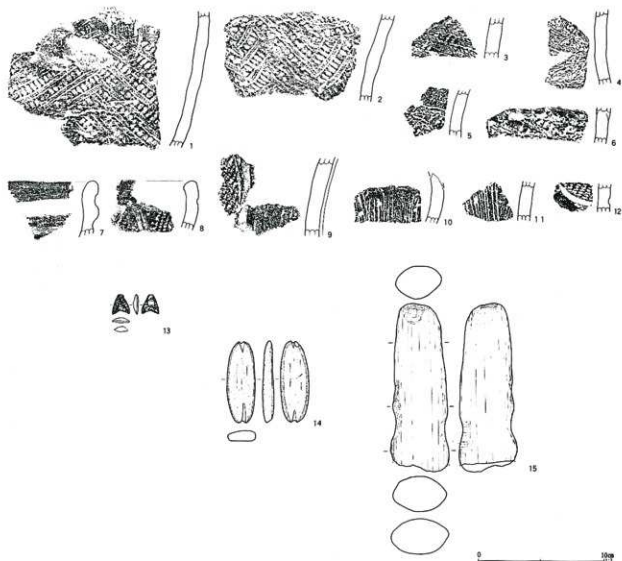
緑泥片岩製で、扁平長楕円形の鏃の長軸上にスリットを刻み込むもので、長さ6.4cm、幅2.25cm、厚さ0.95cm、重さ21.6gを測る。

石剣(15)

断面楕円形で、棒状を呈する石剣と思われ、両サイドに抉りが入る。柄の部分のみ現存し、緑泥片岩製で、長さ13.2cm、幅4.65cm、厚さ2.8cm、重さ266.73gを測る。

第258図1・2・5は第1号住居跡出土。他は古代以降の遺構等から出土したものである。3・4・6は第51号住居跡、7は第58号住居跡、8は第50号住居跡、

第258図 第1号住居跡・グリッド出土遺物



9は第55号住居跡、10は第112号住居跡、11は第113号住居跡、12は第59号住居跡からそれぞれ検出されてい

る。13の石鎌は第75号住居跡、14の石錘は第53号住居跡、15の石剣は第58号住居跡出土。

3. 古代・中世の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

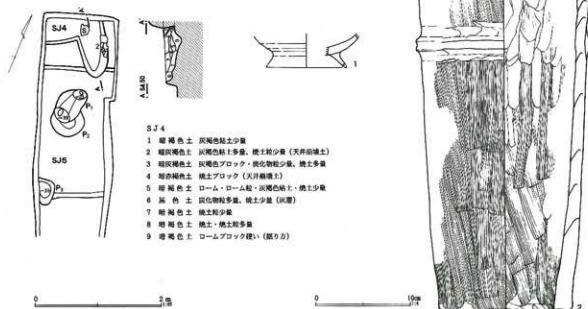
第4号住居跡 (第259図)

第4号住居跡は、C-13グリッドに位置する。調査区北西部にあり、第5号住居跡を切っていた。カマドのみ検出され、遺構の全容は不明である。主軸方向はN-152°-Eを示す。

カマドは南壁に設置され、燃焼部は壁を72cm切り込んでいた。袖はなく、カマド左袖の状況からコーナー部に位置する可能性が高い。埋土は9層に分かれ、第9層上面が火床面である。底面はやや凹凸があるが、床面と同一レベルで続く。左側壁には円筒埴輪片が補強材として使用されていた。また、カマド前面から出土した片岩系の板石はカマド補強材として使用されたものと推定される。

出土遺物はロクロ土師器高台椀 (第259図1) と、円筒埴輪片 (第259図2) がある。円筒埴輪片は古墳から抜き取ったものをカマド補強材として二次利用されたものと考えられる。住居の時期はロクロ土師器高台椀

第259図 第4・5号住居跡・出土遺物



第119表 第4号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台椀		3.5		ADEH	3	橙	15	ロクロ土師器
2	円筒埴輪		34.3	(13.8)	DH	1	橙	25	No.1

の存在から10世紀後半～11世紀と考えられる。

第5号住居跡 (第259図)

第5号住居跡は、C・D-13グリッドに位置する。調査区北西端部にあり、狭長い調査区に制約されて、遺構の詳細は不明。第4号住居跡に切られていた。

平面形は方形系と推定されるが、東壁と西壁は調査区外にあり、規模は確定できない。残存規模は長軸2.20m、短軸1.18m (現在長)、深さ0.30mを測る。主軸方向はN-72°-Eを示す。

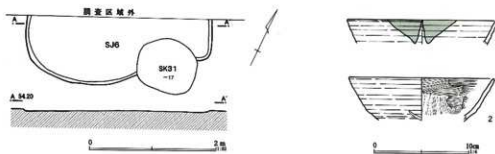
床面はやや凹凸が顕著で、堅く踏み固められた箇所はみられなかった。カマドは検出されなかった。

ビツは3本検出されたが、伴うものではない。遺物は検出されず、住居の時期は不明である。

第6号住居跡 (第260図)

第6号住居跡は、D-15グリッドに位置する。住居北半は調査区外にあり、遺構の詳細は不明である。南壁部は第31号土壇と重複し、本住居跡の方が古い。

第260図 第6号住居跡・出土遺物



第120表 第6号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	灰釉碗	(16.0)	2.5		E	1	灰白	5	内外面とも施釉 東濃産 黒色粒子混入
2	高台碗	(15.4)	4.5		DE J	1	にぶい黄褐	15	SJ 6 + SK31 ロクロ土師器 内面ミガキ

平面形は方形系で、南壁から西壁にかけて丸味を帯びている。規模は長軸2.95m、短軸1.12m（現在長）、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-63°-Eを示す。

床面は平坦で全体に堅く踏み固められていた。カマドは検出されなかった。また、ピット他の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は灰釉陶器高台碗（第260図1）とロクロ土師器高台碗（第260図2）が出土した。灰釉碗は漬け掛けか。胎土から東濃産と思われる。ロクロ土師器高台碗は内面へラミガキ調整されている。住居の時期は10世紀後半～11世紀と考えられる。

第7号住居跡（第261図）

第7号住居跡は、C・D-15・16グリッドに位置する。第4号溝跡が覆土上面に被っていた。また、第8号井戸跡と重複し本住居跡の方が新しい。北西コーナーは僅かに調査区外に延び、検出できなかった。

平面形は横長方形で、北東コーナーに張り出し状の施設が伴う。規模は長軸5.70m、短軸3.87m、深さ0.21mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

床面は小さな凹凸が顕著であるが、全体に堅く踏み固められていた。カマドは東壁の南端に設置されている。燃焼部は壁を切り込んで構築され、煙道部は削平されていた。燃焼部底面は概ね平坦で、床面との段差はあまりない。燃焼部中央付近の底面には石製支脚が設置され、支脚前面は強く被熱していた。燃焼部から

は礫が散乱した状態で検出された。カマド構築材として利用されたものであろう。袖は検出されなかった。

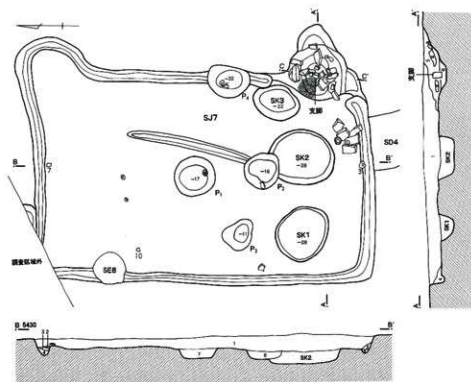
ピットは4本検出されたが、いずれも柱穴とはならない。Pit 1～3は住居に伴う可能性は低い。Pit 4は壁を挟り込むように掘られており、ロクロ土師器高台碗が出土している。性格は不明であるが、住居に伴う可能性がある。

第1号土壌は、南西コーナー付近にあり、カマド対向ピットとなるかもしれない。第2・3号土壌は床下土壌または掘り方と思われる。

壁溝はカマドを除いてほぼ全周するものと考えられる。特に、北東コーナーの張り出し部に沿って巡っており、張り出し部が住居と一体の施設であることを裏付けている。張り出し部は半円形の弧を描くように東壁の北端に取り付き、床面との段差はなく続いていた。床面の一部と見なすべきであろう。

出土遺物はロクロ土師器の小皿（第261図1～3）、無台の皿（4）、高台碗（5～9）、土師器の裏底部（10）、須恵質の甌（11）、土師質の羽釜（12）が検出された。5・7のロクロ土師器高台碗は内面にミガキが施され、7は黒色処理、5についてもその可能性がある。11の甌は須恵質でロクロ整形されている。また、12の羽釜も土師質ではあるが、ロクロ整形されている。住居の時期は10世紀後半と考えられる。なお、1・2の小皿と11の甌は伴う可能性は低いであろう。

第261図 第7号住居跡・出土遺物



SJ7

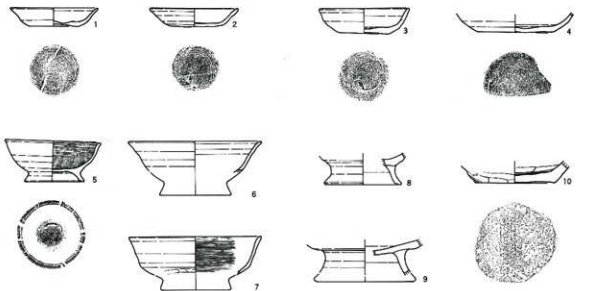
- 1 黒褐色土 ローム殻・赤色砂・白色泥
少量、ロームブロック残骸
- 2 黄褐色土 しまり悪い
- 3 黒褐色土 ローム殻少量
- 4 黒褐色土 ローム殻・ロームブロック
多量、焼土殻残骸（カマド）
- 6 黒褐色土 焼土殻・焼土ブロック・炭化
物殻少量（カマド）

ピット 1

ピット 2

ピット 3

ピット 4



第121表 第7号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	小皿	9.3	1.8	5.3	AEH	1	橙	70	ロクロ土師器 底部未切り
2	小皿	9.4	1.9	5.2	EH	1	橙	70	ロクロ土師器 底部未切り
3	小皿	9.6	2.6	5.2	DEH	1	橙	90	№6 ロクロ土師器 底部未切り
4	皿		1.9	(8.0)	ABDEH	1	橙	20	ロクロ土師器 体部回転未切り
5	高台碗	10.1	4.2	6.3	DEH	1	明赤褐	80	カマド №16 ロクロ土師 内面ミガキ一部黒色
6	高台碗	(14.0)	3.2		DEH	2	にぶい橙	10	ロクロ土師器
7	高台碗	(14.0)	4.0		ADEHJ	2	にぶい黄橙	15	№13 ロクロ土師器 内面ミガキ+黒色処理
8	高台碗		3.3	(8.0)	DEH	2	にぶい黄橙	10	ロクロ土師器
9	高台碗		3.7		ADEHJ	2	にぶい黄橙	25	ロクロ土師器
10	甕		2.3	8.5	BHJ	2	明赤褐	80	№4
11	甕		12.7	26.6	H	1	灰黄	60	カマド 須恵質 ロクロ整形
12	羽釜	20.0	5.8		ADEHJ	1	橙	5	土師質 ロクロ整形

第8号住居跡 (第262図)

第8号住居跡は、D-16グリッドに位置する。

平面形は長方形で、規模は長軸3.57m、短軸2.80m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-91°-Eを示す。床面は概ね平坦であるが、細かい凹凸が比較的顕著であった。カマド前面を中心に堅く踏み固められていた。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切り込んで構築されるが、掘り込みは浅く床面と段差無く続く。灰層は認められたものの底面及び側壁の被熱箇所はみられなかった。

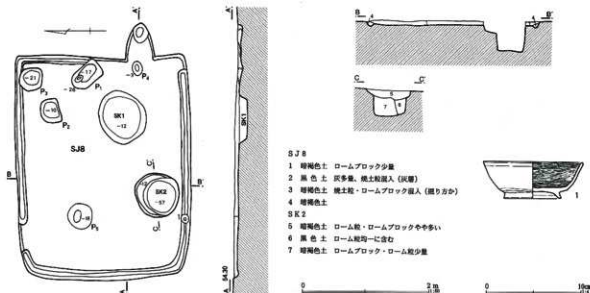
ピットは5本検出された。いずれも浅く、住居の柱穴とはならないであろう。Pit 1、Pit 5は住居よりも新しい時期の所産である。土壌は2基検出された。第

1号土壌は床下土壌の可能性がある。第2号土壌は南壁際から検出された。深さ57cmで、埋土の状態から住居に伴うことは確実である。南西コーナーからはややずれるが、カマド対向ピットに相当するものと考えられる。壁溝はカマド周囲と北壁の一部を除いて巡っていた。

出土遺物は、ロクロ土師器の高台碗が南壁際の壁溝に落ち込むような状態で検出された(第262図1)。

第262図1は小型のロクロ土師器高台碗である。口径10.5cm、器高3.9cm、高台径6.0cm。角閃石、白色粒子、片岩を含みやや粗い胎土である。焼成は普通、色調はにぶい褐色。高台部内面は撫でられて、切り離し痕は不明瞭であるが、高台周りの底部外面は回転ヘラ

第262図 第8号住居跡・出土遺物



ケズリが施されている。内面はヘラミガキと黒色処理が施され壁をもつ。高台端部と口縁部を一部欠く。

時期は10世紀後半と考えておきたい。

第9号住居跡 (第263図)

第9号住居跡は、調査区西端のE-13・14グリッドに位置する。西壁部は調査区外に延び、遺構の詳細は不明である。重複遺構との新旧関係は、第3号溝跡に東壁を切られ、第10・12号住居跡を切っている。

平面形は方形と推定され、規模は長軸3.25m、短軸2.82m(現在長)、深さ0.28mを測る。主軸方向はN-105°-Eを示す。

床面は概ね平坦で全体に堅く締まっていた。カマドは東壁の南端に設置されたものと考えられる。燃焼部と煙道部の一部が残存するが、焚口部からカマド前面にかけては第3号溝跡によって失われていた。燃焼部から煙道部にかけての側壁は強く被熱していた。燃焼部底面は床面とほぼ同一レベルで、煙道部は斜め上方に立ち上がっていた。

ピットは1本南壁西端に検出された。西半は調査区外に延びており、深さ59cm。住居に伴うもので、カマド対向ピットと考えられる。壁溝は残存部では全周する。

出土遺物は土師器甕(第264図1・2)とロクロ土師器の高台椀(3)が検出された。土師器甕(1・2)は胎土からおそらく同一個体と推定される。口縁部が短く外反し、胴部は縦方向のヘラケズリが施される。胴部下端は横方向のヘラケズリで、底部は砂底である。器壁は厚い。ロクロ土師器高台椀(3)は底部に回転糸切り痕を残す。内面はミガキと黒色処理が施されている。また、重複する第10号住居跡出土のロクロ土師器環(第264図8)の帰属に関しては不明とした方が良いでしょう。時期は10世紀後半-11世紀と考えられる。

第10号住居跡 (第263図)

第10号住居跡は、調査区西端のE-13・14グリッドに位置する。第9号住居跡及び第3号溝跡に住居の大半を破壊され、西壁部は調査区外に延びるため、遺構の詳細は不明とせざるを得ない。

平面形は長方形と推定され、規模は長軸3.65m、短軸2.66m(現在長)、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-0°を示す。

カマド・ピット等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器の鉢(第264図4)、環(5-7)、ロクロ土師器環(8)が検出された。土師器環は模倣環と有段口縁環で、口径は12cm前後である。8のロクロ土師器環は重複する第9号住居跡に伴う可能性が高い。

住居の時期は土師器環の特徴から7世紀前半と考えられる。

第11号住居跡 (第263図)

第11号住居跡は、調査区西端部のE-14グリッドに位置する。第3号溝跡及び第12号住居跡に削平され、遺構の遺存状態は悪い。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸2.70m、短軸1.85m、深さ0.04mを測る。主軸方向はN-78°-Eを示す。

床面は平坦である。カマドは東壁に設置されるが、一部は第12号住居跡によって破壊されていた。カマド燃焼部は壁を切り込んで構築され、第5層が灰層である。袖は遺存していなかった。

ピットは検出されなかった。壁溝は残存壁に沿って巡っている。

出土遺物は土師器甕が1点カマドから出土したのみである(第264図9)。口縁部が「く」の字状に折れ、胴部の膨らみは弱い。出土遺物の特徴及び重複関係から住居の時期は8世紀前半頃と推定される。

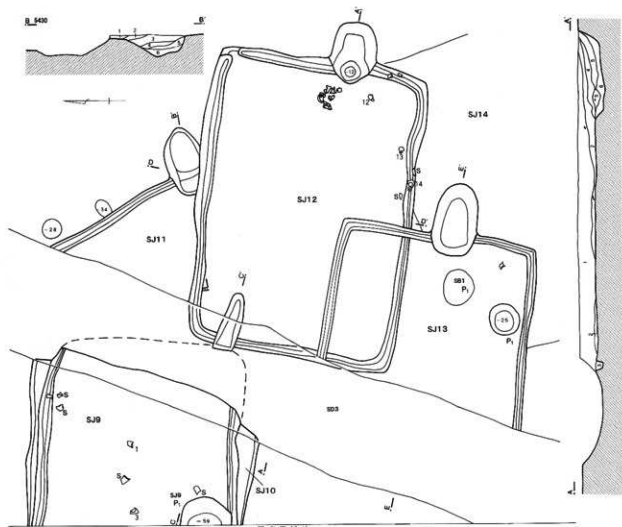
第12号住居跡 (第263図)

第12号住居跡は、調査区西端部のE・F-14グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第11・14号住居跡を切り、第9・13号住居跡及び第3号溝跡に切られていた。

平面形は長方形で、規模は長軸4.75m、短軸3.60m、深さ0.29m。主軸方向はN-102°-Eを示す。

床面は概ね平坦で、カマド前面から住居中央部が堅く踏み固められていた。壁際は相対的に軟弱である。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を

第263図 第9～13号住居跡



調査区域外



SJ 9

- 1 褐色土 ロームブロックまばらに含む
- 2 黒褐色土 ローム粒少量
- 3 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒・白色粘土ブロック少量
- 4 粘土 [天井部構築土]
- 5 暗褐色土 焼土粒少量 (灰入土)
- 6 黒色土 灰・焼土含む (灰層)

SJ 11

- 1 暗褐色土 ローム粒多量

カマド

- 1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・焼土ブロック多量
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒多量
- 3 赤褐色土 焼土
- 4 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量 (灰層)
- 5 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量

SJ 12

- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒多量、白色粘土粒層
- 2 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量
- 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量

カマド

- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒少量
- 2 黒褐色土 ローム粒・焼土粒・焼土ブロック多量 (灰層)
- 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量

SJ 13

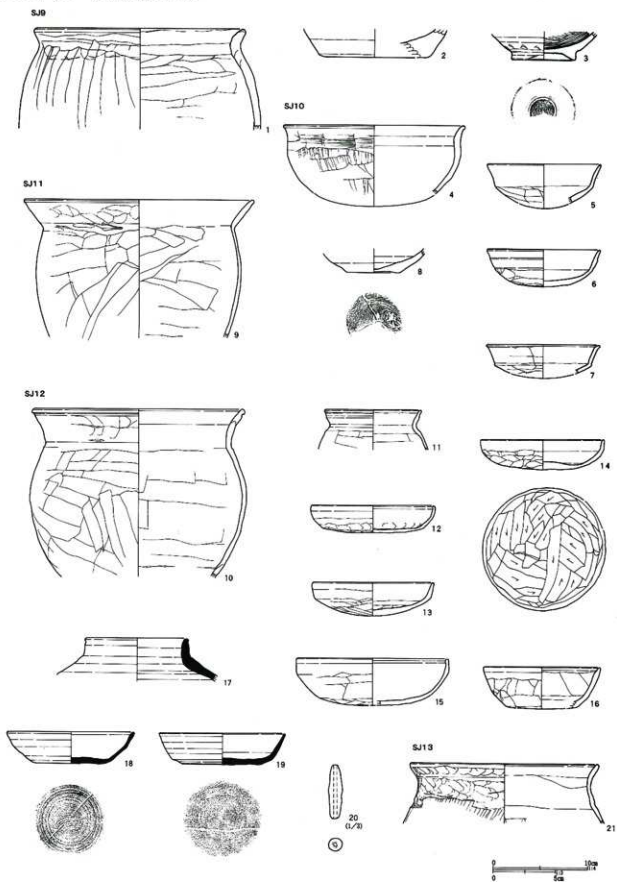
- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量

カマド

- 1 赤褐色土 焼土ブロック
- 2 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック少量
- 3 黒色土 焼土粒構築 (灰層)
- 4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒・焼土ブロック少量

0 2m

第264图 第9~13号住居跡出土遺物



第122表 第9～13号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(22.5)	10.2		ADH	3	にぶい橙	20	SJ9 No.4 胴部タテケズリ 2と同一個体か
2	甕		3	(12.0)	BEHJ	3	黒褐	15	SJ 9 胎土粗い 胴部下端ヘラケズリ 底部離れ砂
3	高台杯		3.7	6.8	D	1	にぶい橙	50	SJ9 No.6 雲母状微粒子含む 体部爪状圧痕
4	鉢	(19.3)	7.1		ADEH	1	橙	20	SJ10
5	杯	(12.0)	4.2		ADH	1	橙	15	SJ10
6	杯	12.0	3.9		AD	1	にぶい橙	70	SJ10 器面刺離
7	杯	(12.0)	3		ADH	1	橙	10	SJ10
8	杯		2.5	5.8	ADEH	2	にぶい黄橙	60	SJ10 ロクロ土師器 底部回転糸切り
9	甕	(24.4)	14.5		ADEH	1	にぶい赤褐	20	SJ11 カマド
10	甕	(22.5)	17.7		ADH	2	にぶい赤褐	20	SJ12 カマド
11	小型甕	(10.2)	4.2		ADEH	2	明赤褐	30	SJ12 カマド
12	杯	(13.0)	2.9		D	1	明赤褐	30	SJ12 No.3
13	杯	(12.8)	3.5		DH	1	明赤褐	30	SJ12 No.2 口縁下無調整
14	杯	11.0	3.1		DH	1	にぶい橙	95	SJ12 No.1
15	杯	(16.0)	4.9		DH	1	にぶい赤褐	20	SJ12 体部+底部ヘラケズリ
16	杯	(12.2)	4.3		DH	2	にぶい橙	20	SJ12 体部+底部ヘラケズリ
17	須恵短頸壺	(10.8)	4.5		E	1	明青灰	10	SJ12 黒色粒吹き出す 秋間産
18	須恵杯	13.4	3.3	7.5	FH	1	灰	55	SJ12 南北企産 底部周辺回転ヘラケズリ
19	須恵杯	13.4	3.3	8.3	FH	3	にぶい黄	60	SJ12 南北企産 焼き甘い 底部全面?ヘラケズリ
20	土錘	長4.2cm	最大径1.1cm	孔径0.3cm	重量3.84g		にぶい橙	SJ12	
21	甕	19.8	6.2		ADEH	1	明赤褐	25	SJ13

切り込んで構築され、第5層が灰層、第6層は掘り方である。明確な袖部は検出されなかった。

壁溝はカマドと北東コーナーを除き全周する。ピット等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器の甕(第264図10)、小型甕(11)、杯(12~16)、須恵器短頸壺(17)、須恵器杯(18・19)、土錘(20)がある。12の土師器杯は平底風で体部は無調整、底部ヘラケズリ。13・14は扁平でやや丸底風。口縁部下に無調整部をもつ。須恵器杯(12・13)は南北企産である。12は底部回転糸切り後周辺ヘラケズリ。13は底部全面回転ヘラケズリと思われるが、中心部が不明瞭。17は胎土から秋間産と考えられる。16は混入である。おそらく重複する第13号住居跡に伴うものと推定される。住居の時期は8世紀中葉~後半にかかる段階であろう。

第13号住居跡(第263図)

第13号住居跡は、F-14グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は第12・14号住居跡、第1号掘立柱建物跡を切り、第3号溝跡に西壁部を切られていた。

平面形は長方形で、規模は南北長3.30m、東西長2.88m(現在長)、深さ0.04mを測る。主軸方向はN-

102°-Eを示す。

床面は平坦で全体に堅く踏み固められていた。カマドは東壁に設置されていた。燃焼部は壁を切り込んで構築され、底面は床面よりも深く掘り込まれている。

第4層が灰層、第5層は掘り方である。袖は検出されなかった。

ピットは1本検出されたが、上面は貼床され住居に直接伴うものではない。

出土遺物は土師器の甕が1点検出された(第264図21)。その他、第12号住居跡出土の土師器杯(第264図16)は体部と底部がヘラケズリされる平底タイプで、おそらく本住居に伴うものと推定される。時期は9世紀後半と推定される。

第14号住居跡(第265図)

第14号住居跡は、F-14グリッドに位置する。重複する第12・13・15号住居跡及び第1号掘立柱建物跡に切られていた。遺構の遺存状態はあまり良くないが、規模や形態は概ね判明する。

平面形は正方形で、規模は長軸5.52m、短軸5.20m、深さ0.13mを測る。主軸方向はN-22°-Wを示す。床面は概ね平坦で堅いが、壁際が軟弱であった。カ

マドは検出されなかった。第15号住居跡SK1の位置または第12号住居跡に削平されたものと思われる。

ピットは床面を除去した段階で2本検出された。Pit 1・2はいずれも主柱穴と考えて良いが、それに対応する北側の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は少ないが、遺存率の高い環が比較的多くまわっている。特に西壁下の床面からやや浮いた位置に、ほぼ完形の土師器環が5枚残されていた。第265・266図1・2・4・6～8は模倣環である。口径11.4～12.4cm、口縁下の稜はまだしっかりしたものが主体である。3・10・11は有段口縁環。11は口径13.4cmと大きく口縁部の段もしっかりしており、相対的に古段階の様相を残している。9は北武蔵型環に混入品である。土師器環類の様相から、住居の時期は7世紀初頭～前葉頃と推定される。

第15号住居跡 (第265図)

第15号住居跡は、F-14グリッドに位置する。第14号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。

平面形は正方形で、規模は長軸3.80m、短軸3.36m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-80°Eを示す。

床面は平坦で、カマド前面から中央部は比較的堅く踏み固められていた。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切り込んでおり、火床面は床面よりも窪んでいる。第5層が灰層、第6層は掘り方である。袖は遺存していなかった。

ピットは床面を除去した段階で3本検出された。Pit 1・2は深いが、規則的な配置を採らない。また、カマド前面の床面下から土壌が1基検出された (SK1)。埋土はロームブロック混じりの褐色土で、いわゆる床下土壌と考えられる。

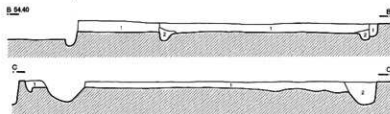
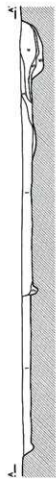
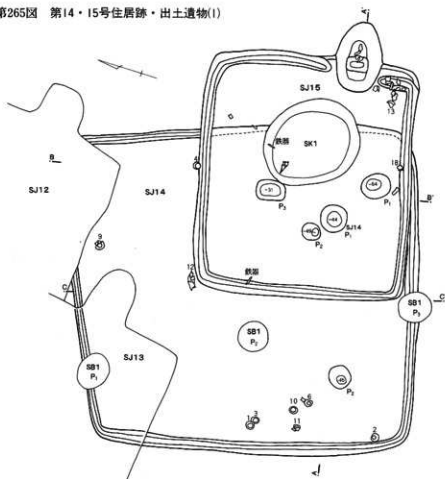
壁溝はカマドを除き全周する。深さ5～10cm。

出土遺物は土師器の環 (第266図13～16)・甕 (21・23)・壺 (22)、須恵器の環 (18)・高台盤? (19)・短頸壺 (20)、鉄鎌 (24)、砥石 (25) がある。13の土師器環はカマド脇から出土した。扁平な器形で底部は丸底風、腰部は無調整である。14も同類である。15は混

第123表 第14・15号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	11.9	3.8		BDEH	1	橙	100	SJ14 No.7 無黒斑
2	環	12.2	4.1		DH	1	褐灰	100	SJ14 No.1 全体に黒ずんでいる
3	環	11.8	4.2		BDH	1	橙	100	SJ14 No.6 無黒斑
4	環	12.2	4.8		BDEH	1	にぶい褐	95	SJ14 No.10
5	環	(12.0)	6.4		ADE	1	橙	15	SJ14
6	環	11.6	4.1		DEH	1	黄橙	95	SJ14 No.2 粉っぽい 無黒斑
7	環	11.4	3.5		ADH	1	橙	70	SJ14 床下
8	環	(11.0)	2.8		AEH	2	にぶい赤褐	10	SJ14 床下
9	環	12.6	3.1		BDH	1	明赤褐	60	SJ14 No.11
10	環	12.4	4.1		BDH	1	黒褐	100	SJ14 No.4 器面剥落
11	環	13.4	3.6		BDH	1	黒褐	60	SJ14 No.5
12	甕か	28.7	16.6		DH	1	にぶい赤褐	30	SJ14 No.9 SJ15一括
13	環	12.7	2.8		DH	1	にぶい黄褐	60	SJ15 No.6
14	環	(14.0)	2.5		ADEG	2	橙	5	SJ15
15	環	(12.0)	3.1		E	2	橙	10	SJ15 床下一括 雲母状微粒子 粉っぽい
16	環				ACDEG	1	橙	5	SJ15 平底風 内面放射略文
17	壺か	(11.0)	2.6		ACDEJ	1	明赤褐	5	SJ15 カマド 内外面赤彩 比企型
18	環		2.5	8.0	BDEF	3	灰白	35	SJ15 No.7 南北企産 底部全面持ちヘラケズリ
19	須恵脚付盤?		1.9	(14.8)	EH	1	にぶい黄橙	10	SJ15 カマド 群馬産か
20	須恵短頸壺	(13.8)	15.0		CF	2	灰黄	20	SJ15 SK1 床下一括 南北企産
21	台付甕	(18.2)	12.2		DH	1	明赤褐	20	SJ14 SD3
22	壺か	(20.4)	6.2		ADEGI	1	橙	5	SJ15
23	甕	(22.0)	5.7		ACDEI	1	橙	5	SJ15
24	鉄鎌	長(6.9)cm 最大幅2.3cm 厚さ0.3cm 重量18.77g SJ15							
25	砥石	長10.1cm 最大幅3.3cm 厚さ3.0cm 重量128.98g SJ15 床下一括							

第265図 第14・15号住居跡・出土遺物(1)

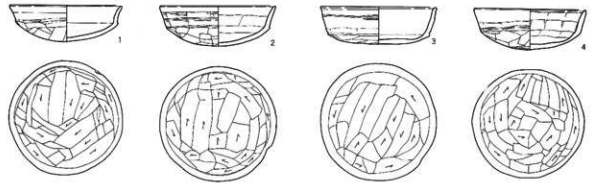


SJ14
 1 暗褐色土 ローム粒・赤色粒少量
 2 暗褐色土 ローム粒多量、赤色粒少量、
 SB1-P2

SJ15
 1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・白色粒少量、
 炭化物微量
 2 暗褐色土 ローム粒多量
 3 暗褐色土 ローム粒微量、焼土粒・
 焼土ブロック少量
 4 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック多量
 5 黒色土 焼土粒少量(炭層)
 6 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、
 焼土粒微量

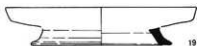
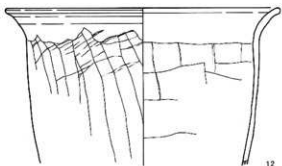
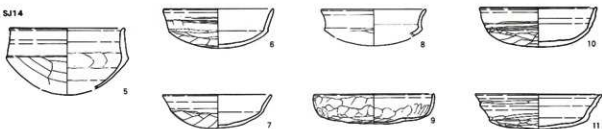


SJ14

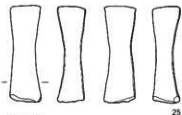
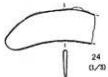
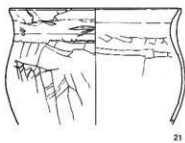
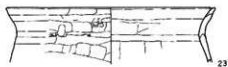
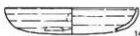
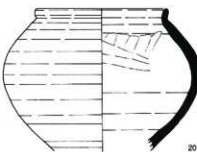


第266图 第14・15号住居跡出土遺物(2)

SJ14



SJ15



入であろう。16は平底暗文環の底部と思われる、内面は放射状暗文が施される。17は内外面赤彩が施され、比企型の小型壺または鉢と考えられる。混入の可能性が高い。18は南比企産の須恵器環。底部は回転糸切り後、手持ちヘラケズリ調整される。焼きは甘い。19は高台盤の脚部か。灰白色でおそらく群馬産と目される。20の短頸壺は南比企産である。1号土壌出土。出土遺物から住居の時期は8世紀中葉～後葉頃と考えられる。

第16号住居跡 (第267図)

第16号住居跡は、E・F-14・15グリッドに位置する。重複する第20号土壌を切り、第17号住居跡に切られていた。

平面形は正方形で、規模は長軸3.60m、短軸3.47m、深さ0.17mを測る。主軸方向はN-96°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマド前面から住居中央部は比較的堅く踏み固められていたが、壁際は軟弱である。カマドは東壁のほぼ中央に設置され、壁を切り込んで構築されていた。袖は検出されなかった。

ピットは1本南西コーナー部に検出されたが、主柱穴とはならないであろう。土壌は2基ある。1号土壌は床下土壌と考えられる。2号土壌としたものは掘り方の一部と考えた方が良からう。

出土遺物は比較的多い(第267・268図1-33)。特にカマドから住居中央部にかけて台付甕の脚部が多数出土した。完形の土師器環(第267図3)は南壁際の床面から若干浮いた位置から出土した。紡錘車(第268図33)は北西コーナー付近の床面出土である。

出土遺物には、土師器皿(第267図1)・環(2-6)、須恵器無台環(7)・高台椀(8-10)・皿(11)・壺瓶類(12-13)、土師器甕(第268図14-20・24・25)・台付甕(21-23・26-32)、石製紡錘車(33)がある。1の土師器皿は体部指頂による丘状とナデ、底部ヘラケズリ調整。2の環は体部下半と底部をケズリ調整。3-5は体部は無調整(ナデ)で、底部をヘラケズリ。須恵器供膳器はいずれも末野産である。12の瓶は湖西産で混入。13の壺底部も混入の疑いがある。高台内面が摩耗しており、硯に転用されたものと思われる。土

師器甕はいわゆる「コ」の字状口縁甕である。時期的には9世紀後半と考えられる。

第17号住居跡 (第267図)

第17号住居跡は、E-14・15、F-15グリッドに位置する。掘り込みがほとんど確認できなかったため、重複関係や規模等の詳細は不明確な点を残す。カマドが第16号住居跡の上に乗っていたため、本住居跡の方が新しいことは確定である。また、重複する第18・19号住居跡との関係については、遺構相互の切り合い関係が明確に把握できなかった。第18号住居跡との関係は出土遺物の時期から本住居跡の方が新しいものと判断した。第19号住居跡は調査時に本住居跡よりも新しいと捉えたが、新旧関係は不明とした方が良いかもしれない。

平面形は方形系と推定される。残存規模は東西長2.88m、南北長2.22mである。主軸方向はN-175°-Wを示す。

床面は削平されていた。カマドは南壁に設置される。燃焼部は壁を切り込んでおり、底面は被熱していた。掘り込みは浅い。

ピットは4本検出された。配置は不規則で、主柱穴とはならないであろう。その他土壌が1基南西コーナー部から検出された。住居に伴うと考えられるが、性格は不明。

出土遺物は土師器環(第268図34)と土師器壺(35)が検出されたのみである。重複遺構との新旧関係から本住居跡に伴う遺物とは考えられない。住居の時期は9世紀後半以降という限定はできるが、正確な時期は不明とせざるを得ない。

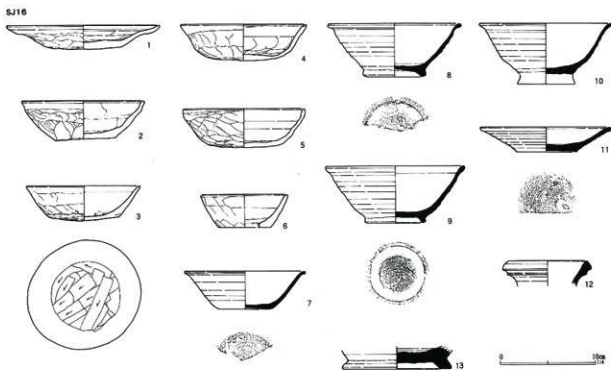
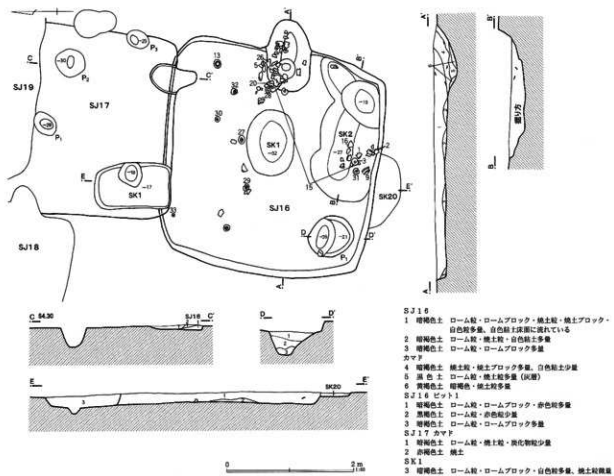
第18号住居跡 (第269図)

第18号住居跡は、E-14グリッドに位置する。重複する第20号住居跡を切り、第17号住居跡に切られていた。

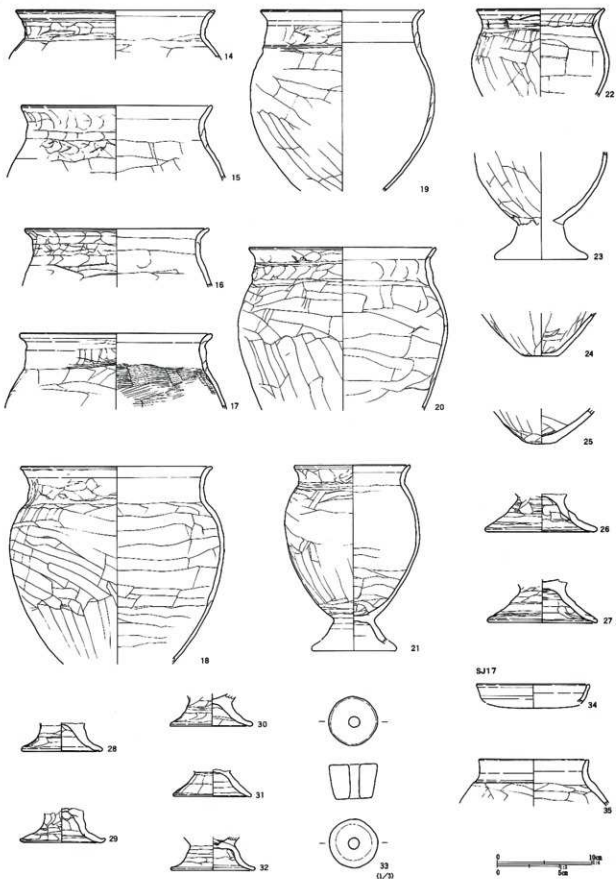
平面形は横長の長方形で、規模は長軸3.49m、短軸2.05m、深さ0.09mを測る。主軸方向はN-102°-Eを示す。

床面はやや起伏がある。カマド前面から住居中央部は比較的堅く踏み固められていたが、壁際は全体に軟

第267図 第16・17号住居跡・出土遺物(I)



第268图 第16·17号住居跡出土物(2)



第124表 第16・17号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	皿	(16.4)	2.5	8.0	DH	1	にぶい赤褐	35	SJ16 No39
2	環	12.8	4.0	6.5	DH	1	にぶい橙	60	SJ16 No42・44
3	環	12.0	4.6	7.5	BC	1	橙	100	SJ16 No38 体部無調整(ナダ) 下端に接合痕
4	環	13.2	3.8		ADH	1	にぶい橙	45	SJ16 Pit1
5	環	12.8	4.0	7.8	DEH	2	にぶい褐	60	SJ16 No19 体部指頭+ナダ 歪みあり
6	環	(9.0)	3.4	(5.6)	DEH	1	橙	25	SJ16 底部、体部下端へラケズリ
7	須恵環	(12.8)	4.0	(6.0)	E I J	3	灰黄	25	SJ16 SK1 末野産
8	須恵高台碗	(14.0)	5.6	(5.8)	E H I J	3	黄灰	20	SJ16 SK1 末野産
9	須恵高台碗	14.4	6.0	6.6	B I	1	灰オリーブ	70	SJ16 No41 末野産
10	須恵高台碗	(14.2)	5.4	5.4	B I	1	黄灰	30	SJ16 末野産
11	須恵皿	(14.0)	2.6	6.2	ABEHI J	3	にぶい褐	25	SJ16 掘り方 末野産
12	須恵瓶	(8.3)	2.2		E H I J	1	灰白	15	SJ16 湖内産
13	須恵壺		2.4	11.5	E H I J	1	青灰	90	SJ16 No11 産地不明(東海産か)底部外面碗に転用
14	甗	(21.0)	5.0		ADH	1	橙	40	SJ16
15	甗	(20.0)	7.8		DH	1	にぶい橙	25	SJ16 No31・48
16	甗	(19.5)	6.0		ADH	1	橙	30	SJ16 No33
17	甗	(20.3)	7.9		ADH	1	にぶい橙	20	SJ16 掘り方
18	甗	(20.4)	20.7		DH	1	赤褐	30	SJ16 掘り方
19	甗	(17.2)	19.0		ADH	1	橙	25	SJ16 掘り方
20	甗	20.0	17.2		ADE	2	明赤褐	50	SJ16 No18・31
21	台付甗	12.3	18.7		ADE	2	にぶい赤褐	50	SJ16 Pit 1
22	小型台付甗	(13.5)	9.1		DEH	2	にぶい褐	25	SJ16
23	小型台付甗		7.8		DH	2	灰褐	30	SJ16
24	甗		4.5	3.7	DH	2	にぶい褐	50	SJ16 Pit 1
25	甗		3.7	3.5	DH	3	灰褐	40	SJ16 歪みあり
26	台付甗		4.0	11.1	ADE	1	にぶい橙	80	SJ16 No20
27	台付甗		4.5	11.0	DH	1	にぶい橙	100	SJ16 No 9
28	台付甗		3.0	8.2	DH	1	にぶい褐	100	SJ16 No49
29	台付甗		3.1	8.2	DH	1	にぶい橙	95	SJ16 No 4
30	台付甗		3.4	8.7	ADH	1	にぶい橙	100	SJ16 No10
31	台付甗		2.8	8.0	DH	1	にぶい橙	95	SJ16 No40 黒斑あり
32	台付甗		3.5	(8.6)	DH	1	にぶい赤褐	80	SJ16 No12
33	石製紡輪車	上径3.85cm 下径2.85cm		孔径0.85cm		厚さ2.7cm	重量51.17g		SJ16
34	環	(12.0)	1.9		ADEG	1	にぶい橙	5	SJ17 カマド
35	小型壺	11.6	4.9		AEH	1	橙	50	SJ17

弱であった。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切り込んで構築され、底面の掘り込みは浅い。

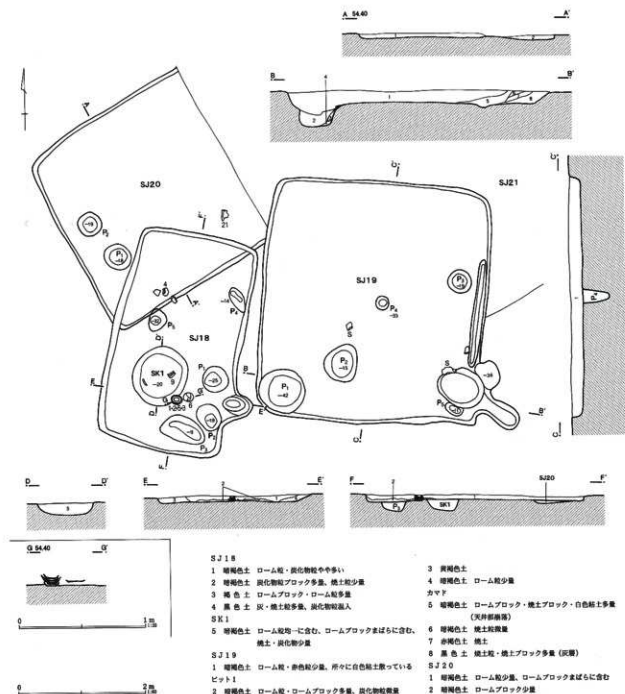
ピットは5本検出されたが、柱穴とはならない。土壌は1基あり、上面に貼床されており床下土壌と考えられる。

出土遺物は少ないが、床面上に土師器環3枚と須恵器高台碗が1枚、計4枚重なった状態で出土した。またその脇に須恵器無台皿が1枚置かれていた。

器種としては土師器環(第270図1~3)、須恵器高

台碗(4・5)、須恵器皿(6)、土師器小型(台付)甗(7・8)、土師器甗(9・10)と土釜(11・12)がある。1は4枚重ねて出土した環の最上部である。2はその下位から出土した。いずれも平底環で、体部は無調整または雑なナダ調整。5の須恵器高台碗は上から3枚目の土器である。末野産で焼きはやや甘い。3の土師器環は最下位から出土した。底部周囲に丸味をもつが、調整技法は1・2と同一である。1・2・5・3の土器はいずれも煤けており、煤の状態から重なった状態で火を受けた様子が窺える。住居の時期は9世

第269図 第18～20号住居跡



紀後半と考えられる。

第19号住居跡 (第269図)

第19号住居跡は、E-14・15グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第20・21号住居跡を切っている。第17号住居跡との関係は本住居跡の方が新しいものと捉えたが不明確である。

平面形は正方形で、規模は長軸3.84m、短軸3.57

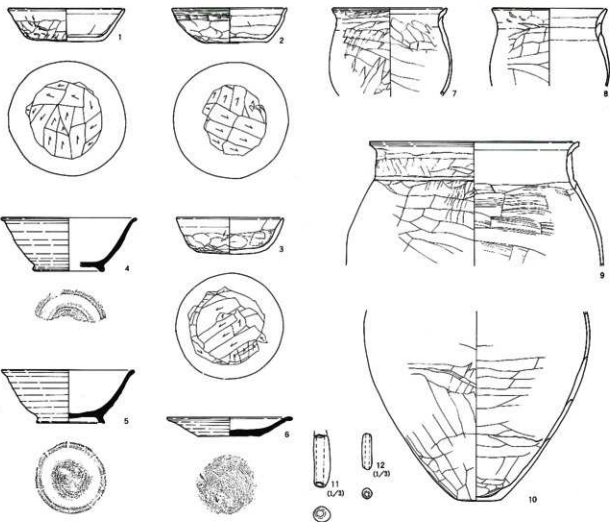
m、深さ0.19mを測る。主軸方向はN-96°-Eを示す。床面は平坦である。カマドは東壁の南端に設置され、主軸は斜傾している。底面の掘り込みは床面と大差なく、ほぼ底面が火床面となっている。第7層・8層は天井部崩落土と思われる。

ピットは3本検出された。Pit 1はカマドに對面する南西コーナー部にあり、住居に伴うカマド対向ビ

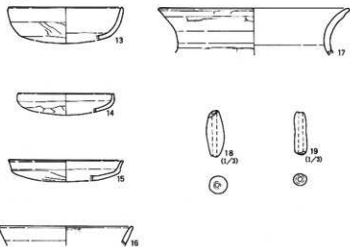
大寄II区

第270图 第18~20号住居跡出土遺物

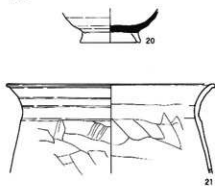
SJ18



SJ19



SJ20



第125表 第18～20号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	12.2	3.5	7.8	AH	2	橙	100	SJ18 No.7 体部無調整
2	環	12.0	3.6	7.0	H	2	橙	100	SJ18 No.8 体部無調整 (ナゲ)
3	環	11.2	3.8	7.0	DH	2	橙	100	SJ18 No.10 体部無調整 (ナゲ)
4	須恵高台碗	(12.2)	5.6	6.2	I J	2	オリーブ灰	30	SJ18 No.2 木野産
5	須恵高台碗	14.0	5.6	7.3	I J	3	にぶい黄褐	100	SJ18 No.9 木野産 内面重ね焼き痕
6	須恵皿	13.3	2	6.6	E I J	1	青灰	95	SJ18 No.6 木野産 歪みあり
7	小型台付甕	(12.0)	9.2		DH	2	にぶい橙	15	SJ18 カマド
8	小型台付甕	(12.0)	8.1		DEH	2	にぶい橙	20	SJ18 カマド
9	甕	22.2	13		BDH	1	橙	30	SJ18 No.5
10	甕	19.9	4.6		DH	1	褐灰	25	SJ18 カマド
11	土鍾	長(4.15)cm 最大径1.32cm 孔径0.52cm 重量5.85g 褐灰 SJ18							
12	土鍾	長2.85cm 最大径0.73cm 孔径0.35cm 重量1.80g 橙 SJ18							
13	環	(12.0)	3.5		DEHI	1	橙	10	SJ19
14	環	(10.0)	2		DEHI	2	橙	10	SJ19
15	環	(10.0)	2.1		DEHI	2	橙	5	SJ19
16	高台碗	(14.0)	2		DEHI	2	にぶい黄橙	5	SJ19 ロクロ土師器 内面ミガキ+黒色処理
17	壺	(20.2)	4.9		DEHI	1	橙	15	SJ19 Pit 4
18	土鍾	長3.6cm 最大径1.4cm 孔径0.3cm 重量6.30g にぶい黄褐 SJ19							
19	土鍾	長3.3cm 最大径1.0cm 孔径0.35cm 重量2.85g にぶい黄褐 SJ19							
20	須恵高台碗	(22.0)	2.5		A E H I J	2	黄褐	35	SJ20 床下 木野産
21	甕	(22.0)	9.4		BH J	1	灰黄	25	SJ20 No.1

ットと考えられる。深さ42cm。

出土遺物は少なく、土師器環(第270図13~15)、ロクロ土師器高台碗(16)、土師器壺(17)と土鍾(18~19)がある。全て小片で、確実に住居に伴うものを抽出することは難しいが、遺構形態や切り合い関係から16のロクロ土師器高台碗が唯一その可能性をもつものと考えられる。口縁部小片であるが、内面ヘラミガキと黒色処理が施されている。住居の時期は10世紀後半~11世紀と推定される。

第20号住居跡(第269図)

第20号住居跡は、E-14・15グリッドに位置する。重複する第18・19・21号住居跡に切られている。

平面形は方形系と推定され、規模は長軸3.13m、短軸2.94m(現在長)、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-62°-Eを示す。

床面は平坦である。カマドは検出されなかった。ピットは2本検出されたが、柱穴とはならないであろう。

出土遺物は須恵器高台碗(第270図20)と土師器甕(21)が検出されたのみである。須恵器高台碗は重複する第18号住居跡に伴う可能性が高い。土師器甕は口

縁部が緩やかに外反する鬼高系の長甕と考えられ、住居に伴うものと考えて良いであろう。住居の時期は7世紀代と推定される。

第21号住居跡(第271図)

第21号住居跡は、D-15、E-14・15グリッドに位置し、重複する第20号住居跡を切り、第19号住居跡が覆土上面に乗っていた。第72号土壌との関係は不明確であるが、本住居跡の方が古い可能性がある。

平面形は正方形で、規模は長軸6.27m、短軸6.17m、深さ0.24mを測る。主軸方向はN-30°-Wを示す。床面は平坦で、Pit 1-Pit 2、Pit 3-Pit 4を結ぶラインの内側が特に堅く踏み固められていた。対照的に主柱穴と壁との間は全体に軟弱であった。埋土にはロームブロックが多量に含まれ(第1~4層)、人為的に埋め戻された可能性がある。

カマドは北壁の中央から僅かに東寄りの位置に設置される(第272図)。燃焼部は先端が僅かに壁を切り込むが、主体はほぼ壁内におさまる。燃焼部両側壁上端は被熱していた。火床面は床面と同一レベルで、黒色の灰層が形成されていた。その上部には天井部崩落層

大審Ⅱ区

と考えられる焼土混じりの黄灰色～白色の粘土が厚く覆っている。また、焚口付近の底面は被熱していた。

カマドの遺存状態は比較的良好で、燃焼部中央からやや奥壁側に土師器甕が2個体、横並びの状態で見出していた(第273図19・20)。両者ともやや奥壁側に傾き、口縁部の上面が削平されていたが、ほぼ原位置を保っているものと考えられる。おそらく掛け口が2個付く、いわゆる二つ掛けカマドの実例とみて良からう。

袖部は白色粘土を用いて構築され、左右両袖内には土師器甕が倒立した状態で埋め込まれていた(第272図11・274図25)。左袖の甕(25)の手前にも崩落した状態で甕が1個体検出された(22)。25に接して倒立した状態で口縁部片が残っていたことから、左袖には2個体の甕が袖の補強材として埋め込まれていたものと考えられる。また、燃焼部から焚口付近の底面には土師器甕が潰れた状態で検出された。復元したところ3個体あり(第273図21・第274図23・24)、入れ子状に重

ねて天井部の架構材に使用したものと推定される。

ピットは4本検出された。深さは60～85cmと深く、配置も規則的であることから住居の主柱穴と考えられる。貯蔵穴はカマド右脇のコーナー部に検出された。楕円形プランで、長さ75cm、深さ31cmである。

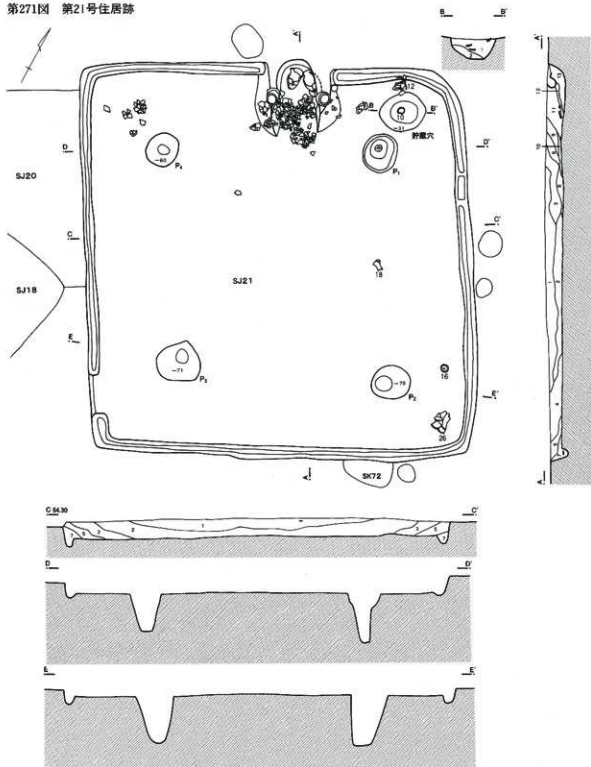
出土遺物は比較的多くまとっており、特にカマド及び貯蔵穴周辺から多く出土している。器種は土師器の環・甕・甔、須恵器の環・蓋・甕・長頸瓶などがある(第272～274図)。第272図9の土師器環はカマド右袖の流出粘土中から検出された。完形品で、おそらくカマド袖上に置かれたものと思われる。10の土師器環も完形品である。貯蔵穴内から出土した。16の須恵器かえり蓋と18の須恵器長頸瓶は床面出土である。

第272図1～10、第273図13は土師器環である。1～4は模倣環で混入の疑いがある。5～10・13は北武蔵型環である。口径は10～11cmと小振り、口縁部は内屈するものと内湾気味のものがある。土師器甕は9

第126表 第21号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(12.0)	3.4		ADEH	2	橙	10	
2	環	(12.0)	3.7		AEH	2	橙	15	
3	環	(11.0)	4.5		DE	2	にぶい黄橙	25	
4	環	(11.0)	4.3		DH	1	橙	25	
5	環	(10.0)	3.8		ADEH	2	橙	25	
6	環	(11.0)	2.5		AD	2	にぶい黄橙	40	カマド No.9 摩滅顕著
7	環	11.0	2.5		ADH	1	明赤褐	30	カマド No.17 右袖下
8	環	(10.6)	3.0		ADEH	2	明赤褐	25	
9	環	10.2	2.7		DH	1	橙	100	カマド No.14 外面黒斑
10	環	10.0	3.0		ADEH	2	橙	100	貯蔵穴 No.1
11	甕	23.0	24.0		BDEH	2	にぶい橙	60	No.16 カマド右袖
12	甕	21.6	23.7		DEHJ	1	にぶい橙	70	No.15
13	環	(11.0)	3.0		D	1	橙	45	
14	須恵甕	(9.4)	3.4		E	1	灰	25	床下 湖西産 内面に自然粘付着 黒色粒子
15	須恵蓋	(23.0)	2.2		BEH	2	黄灰	5	末野産
16	須恵蓋	11.4	3.8		BEJ	2	灰白	100	No.12 秋間産? つまみ中心からずれる
17	須恵環	(10.0)	2.6		EH	1	青灰	10	蓋かもしれない 湖西産
18	須恵長頸瓶	12.2	13.9		BEH I J	1	青灰	90	No.11 末野産か 頸部破り目
19	甕	(23.2)	35.1		DEHJ	2	橙	40	カマド No.1
20	甕	(22.0)	35.3		ADH	1	橙	60	カマド No.2
21	甕	23.0	34.3		ADEH	1	にぶい黄橙	80	カマド No.5・10カマド右袖
22	甕	22.0	33.1	4.5	ADEH	1	明赤褐	90	カマド No.7・8・11 袖 No.10
23	甕	22.4	33.2		ADEH	2	にぶい橙	70	カマド No.4・5・8・11・15 袖 No.12
24	甕	(21.8)	30.7		ADEH	2	明赤褐	70	カマド No.3・4・6・7
25	甕	23.2	30.5		ADEH	2	橙	90	カマド No.15 袖 No.12
26	甔	(26.2)	28.0	8.0	BDEH	1	明黄褐	25	No.13 黒斑あり

第271図 第21号住居跡

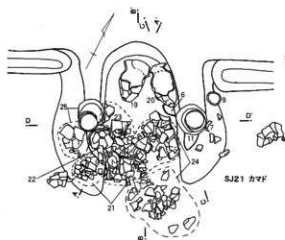


SJ21

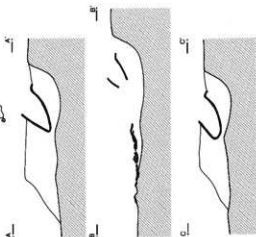
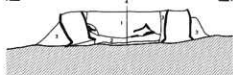
- | | |
|---|--------------------------------------|
| 1 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック多量、ローム少量 (埋め戻し) | 10 黒褐色土 灰褐色粘土多量、粘土粒少量 (カマド周囲積土) |
| 2 黒褐色土 ローム・ローム殻多量、ロームブロック・灰化物粒少量 (埋め戻し) | 11 黄灰色粘土 粘土・黒色土ブロックまばらに含む (カマド天井部積土) |
| 3 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック多量 (埋め戻し) | 12 黄灰色粘土 粘土・黒土ブロック多量 (天井部積土) |
| 4 暗褐色土 ロームブロック少量より少ない (埋め戻し) | 13 黒色土 灰多量 (灰層) |
| 5 黒褐色土 ローム・ローム殻・灰化物粒少量 | |
| 6 黒褐色土 灰褐色粘土少量 | SJ21 野焼穴 |
| 7 暗褐色土 ローム・ローム殻多量、ロームブロック少量 | 1 黒色土 ローム殻・ロームブロック混入 |
| 8 黒褐色土 灰化物粒多量、ローム粒、粘土粒少量 | 2 褐色土 ロームブロック混入 |
| 9 黒褐色土 灰褐色粘土・ロームブロック多量 (カマド周囲積土) | |

0 2m

第272図 第21号住居跡カマド・出土遺物(1)



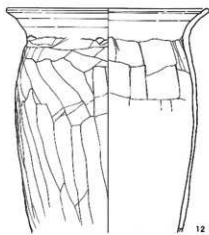
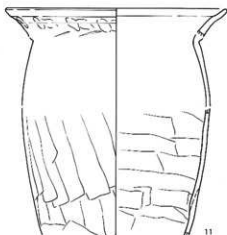
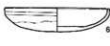
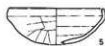
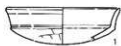
D.54.30



S.J.21 カマド

- 1 黄灰色粘土 粘土・黒色土ブロック少量
- 2 黄灰色粘土 粘土・焼土ブロック多量
- 3 黄灰色粘土 黒色土ブロック含む(細碎粘土)
- 4 黒色土 灰多量(灰層)

0 1m

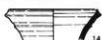


0 1m

第273図 第21号住居跡カマド出土遺物(2)



13



14



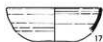
16



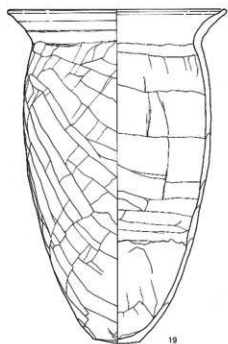
18



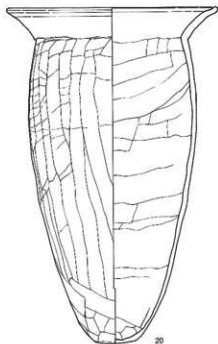
15



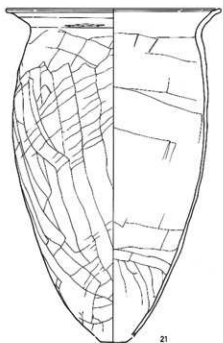
17



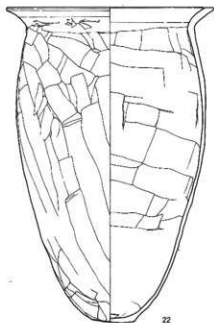
19



20



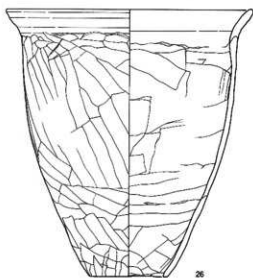
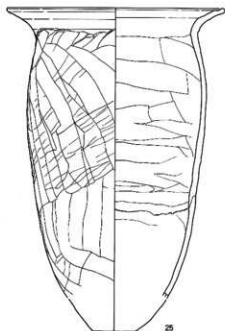
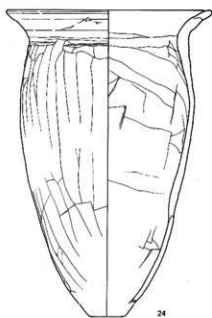
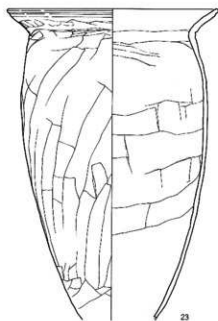
21



22



第274図 第21号住居跡カマド出土遺物(3)



点ある(第272図11・12、第273図19-22、第274図23-25)。口縁部は「く」の字状に外反する長胴甕である。胴部のケズリは縦方向のケズリと斜めケズリを施すものがある。器高は33-35cm程である。14の甕は湖西産、15の甕は末野産と思われる。16の小型かえり蓋は基部の太い宝珠つまみが付き、胎土に粗い礫と黒色粒子が多く含まれる。色調は黄灰色からくすんだ灰色で

ある。秋間産の可能性があろうか。17は坏としたが蓋かもしれない。湖西産。18の長頸甕は口縁直下に段が付き、頸部に絞り目が残る。産地は不明確であるが、東海産ではなかろう。胎土に多量の白色鉱物と共に片岩様の礫も見え、あるいは末野産の可能性もある。住居の時期は7世紀後半と考えられる。

第22号住居跡 (第275図)

第22号住居跡は、D・E-15・16グリッドに位置する。第4号溝跡が住居上部を横断していた。また、第75号土壌が北東コーナー部に重複するが、本住居に伴う張り出し施設を土壌と誤認した可能性がある。

平面形は横長方形で、規模は長軸3.48m、短軸2.78m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-93°-Eを示す。

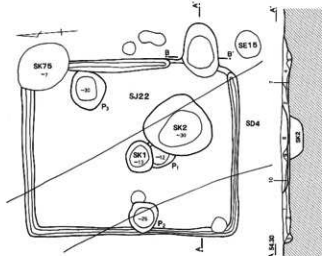
床面はゴツゴツとした凹凸が顕著で、特に堅く踏み固められた軽石は認められなかった。カマドは東壁の南端に設置され、燃焼部は壁を切り込んで構築されていた。底面の掘り込みは浅く、床面との段差はあまりない。側壁は弱く被熱していた。袖部は検出されなかった。

ピットは3本検出されたが、いずれも柱穴とはならない。いわゆるカマド対向ピットは存在しなかった。土壌は2基あり、上面に貼床されていたことから床下土壌と考えられる。

出土遺物は少なく、ロクロ土師器高台碗が2点検出されたに留まる (第275図1・2)。

第275図1はロクロ土師器高台碗で、高台部を欠いている。体部下端に手持ちヘラケズリ調整が施されている。推定口径12cm前後、器高は4.9cm。胎土に赤色粒子・白色粒子・角閃石・砂粒を含む。焼成は普通で色調はにぶい黄橙色。残存率は10%。覆土出土。2はロ

第275図 第22号住居跡・出土遺物



クロ土師器高台碗で口縁部が欠失する。内面はヘラミガキと黒色処理が施されている。器高3.8cm、高台径8.2cm。胎土に角閃石・白色粒子・砂粒・雲母状微粒子を含む。焼成は普通。色調は橙色。残存率は60%。1号土壌出土である。住居の時期は10世紀後半～11世紀と考えられる。

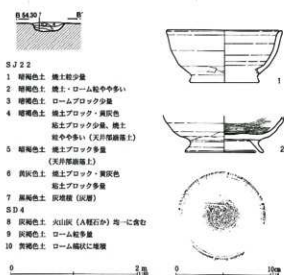
第23号住居跡 (第276図)

第23号住居跡は、F-14・15・16、G-15グリッドに位置する。第24・25号住居跡、第1号不明遺構、第62・63号土壌を重複し、本住居跡が最も古い。1度乃至2度建て替えた形跡が認められ、拡張後の住居跡を第23a号住居跡とする (第276図)。

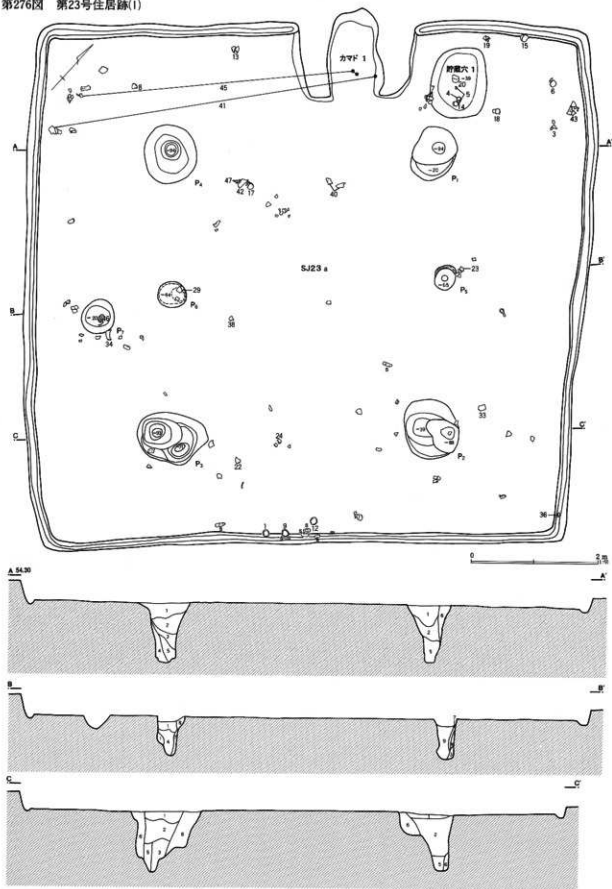
第23a号住居跡は一辺8mを越える大型住居跡である。平面形は正方形で、規模は長軸9.05m、短軸8.21m、深さ0.23mを測る。主軸方向はN-41°-Wを示す。

床面は平坦である。カマド前面から柱穴の内側が非常に堅く踏み固められていたが、柱穴外側の壁際は全体に軟弱であった。

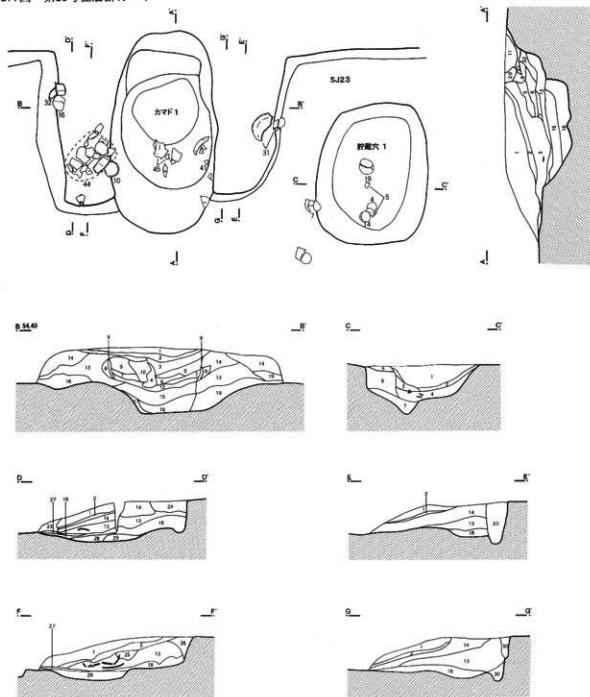
カマドは北西壁の東寄りに設置される (1号カマド)。燃焼部先端は僅かに壁を切り込んでいるが、大半は壁内におさまる。黄灰色～白色粘土を用いて構築されており、燃焼部両側壁は被熱していた (第277図第9層)。被熱部分での内幅は約70cmである。第12層が灰層である。カマド袖は白色粘土を積み上げて構築され、



第276图 第23号住居跡(1)



第277図 第23号住居跡カマド

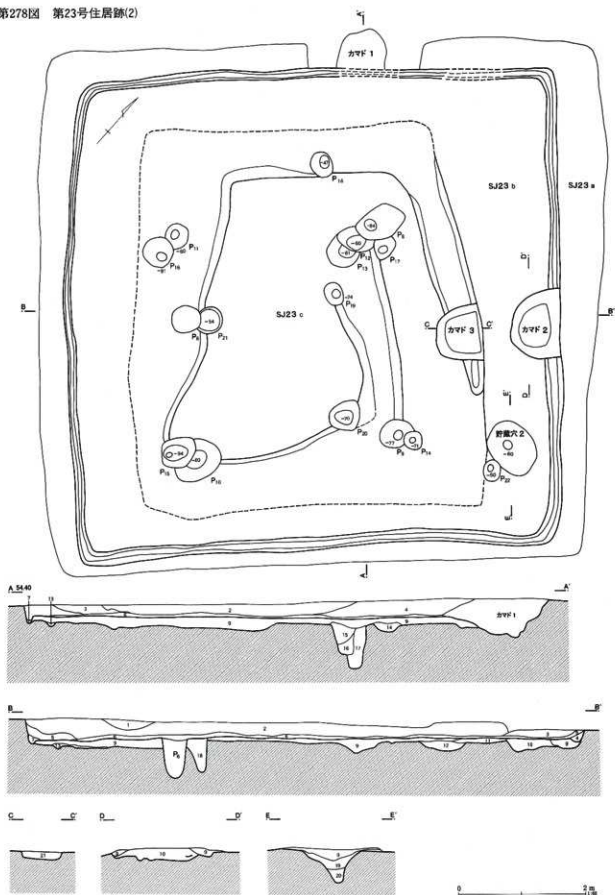


カマド 1

- 1 黄灰色粘土 (天井部崩落土)
- 2 灰黄色土 (天井部崩落土)
- 3 黄灰色粘土 黒色土・炭化物を含む (天井部崩落土)
- 4 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を含む (跡10からの混入土)
- 5 黄灰色粘土 オレンジ色に強く焼熟
- 6 黄灰色粘土 焼じ焼熟無し
- 7 黄灰色粘土 オレンジ色に強く焼熟
- 8 明赤褐色粘土 強焼熟土
- 9 明赤褐色粘土 強熟土
- 10 暗褐色土 強熟土 (跡け口焼熟土崩落か)
- 11 暗褐色土 強熟土 (天井部内崩落土か)
- 12 黒色土 焼土・炭化物を含む (灰層)
- 13 黄灰色粘土
- 14 褐色粘土 焼土・暗褐色土・ローム粒を含む (埋藏層土)
- 15 褐色土 焼土多量、炭化物散在、灰・白色粘土混入 (盛り方)

貯蔵穴 1

- 1 暗褐色土 ローム粒、白色粘土を含む (盛り方)
- 2 黄灰色土 暗赤褐色を含む (灰層)
- 3 黒色土 灰・ローム粒を含む
- 4 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックや多い、灰・炭化物散在
- 5 黒褐色土 (盛り灰)
- 6 暗褐色土 暗褐色土、ロームの混入 (盛り方か?)
- 7 暗褐色土 ロームブロック混入
- 16 暗褐色土 ローム粒、白色粘土を含む (盛り方)
- 17 黄褐色土 黒色土の混入層 (盛り方)
- 18 暗褐色土 ロームブロックや多い
- 19 暗褐色土 (住跡一次埋藏土)
- 20 暗褐色土 ローム粒多量、焼土混入
- 21 暗褐色土 (混入土)
- 22 暗褐色土 焼土ブロック多量
- 23 黒色土
- 24 黄灰色粘土 黒色土上の混入層
- 25 黒色土 白色粘土を含む
- 26 黒色土 白色粘土ブロック混入
- 27 黒色土 (灰層)
- 28 灰褐色土
- 29 暗褐色土 ロームブロック混入 (盛り方)
- 30 黒色土 ローム粒、白色粘土多量



左袖内からは土師器甕(第280図44)が潰れた状態で出土した。袖の補強材として使用されたものであろう。左袖下面には、薄い灰混じりの層(第27層)が認められ、カマド自体、一度作り替えられた可能性がある。

ピットは7本検出された。Pit 1～Pit 6は住居に伴う柱穴と考えられる。Pit 1～Pit 4は深さ90cm前後を測り非常に深く主柱穴とみて良い。Pit 5・6は規模がやや小さく、深さもやや浅い。梁を支える支柱であろうか。Pit 7は住居に伴うが、柱穴とは異なる。

貯蔵穴はカマド右脇にある。楕円形プランで長さ1.10m、短径0.88m、深さ0.38mである。内部には灰層が流れ込んでいた。断面観察から、使用時には第5～7層は機能しておらず(掘り方)、幅はもっと狭く70cm程と考えられる。壁溝は全周する。

出土遺物は多い(第279・280図)。カマドと貯蔵穴周辺、南東壁際からまともに出土している。カマド内からは須恵器蓋(第280図37)と土師器甕(41・45)、カマド左袖内からは補強材として使用された土師器甕(44)の他に、10・16の土師器環と土師器皿(32)が埋め込まれた状態で出土している。右袖からは31の土師器皿が同様に埋め込まれた状態で検出されている。貯蔵穴内からは4・5・14・19の土師器環が検出された。また、その周辺から7・15・18の土師器環が出土している。18は床面、15は外部(棚状施設?)から斜めに転落したような状態で検出されている。

南東壁直下の、床面より僅かに浮いた位置に土師器環が3枚並んで検出された(第279図1・9・12)。38の須恵器環は住居中央からやや南西で床面から8cm浮いた位置から出土した。

第23号住居跡土層

S J 2 3 111-6

- 1 黒色土 焼土粒やや多い、ローム粒少量
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量
- 3 褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多い
(古い灰混じり)
- 4 褐色土 ロームブロック多量
- 5 黒色土 ローム粒少量(柱状?)
- 6 暗褐色土 ロームブロック多量
- 7 暗褐色土 褐色土ブロック多量
- 8 黄褐色土 ローム粒・褐色土粒多量
- 9 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量

S J 2 3

- 1 黄褐色土 ローム粒・焼土粒多量
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒少量
- 3 黄褐色土 ローム粒多量、焼土粒少量
- 4 黄褐色土 ローム粒・焼土粒・ロームブロック・白色粘土多量
- 5 灰色土 ローム粒多量
- 6 黄褐色土 ローム粒・焼土粒少量、東側では灰カマドより流出した白色粘土少量(掘り出した灰混じり)
- 7 暗褐色土 ローム粒多量
- 8 黄褐色土 ローム粒・焼土粒・白色粘土多量
- 9 黄褐色土 ロームブロック・焼土粒多量(掘り方)
- 10 白色粘土 焼土ブロック多量(カマド2)

11 暗褐色土 白色粘土ブロック・焼土粒やや多い(掘り方)

- 12 褐色土 白色粘土ブロック・焼土ブロック多量(カマド掘削)
- 13 黒色土 ローム粒少量(壁際)
- 14 黒色土 ロームブロック多量
- 15 黒色土 ロームブロック塊に含む(ピット蓋多量)
- 16 黒色土 ロームブロックやや多い(ピット蓋多量)
- 17 黄褐色土 ロームブロック多量、褐色土塊(ピット掘り方)
- 18 暗褐色土 ローム(埋戻し)
- 貯蔵穴2
- 19 暗褐色土 ロームブロックやや多い、褐色土粒多量
- 20 褐色土 ロームブロック多量
- カマド3
- 21 褐色土 白色粘土ブロック・焼土ブロック多量(掘り方・壁の灰混じり)

第23b号住居跡は、第23a号住居跡の床面下から検出された。第23a号住居跡各コーナー部を内側に縮小した形態である。壁溝が全周するため平面形態や規模は知ることができ。平面形は正方形で、規模は長軸7.90m、短軸7.61mを測る。主軸方向はN-48°-Eを示す。

床面は第23a号住居跡造成時に削平されたものと思われ遺存しない。カマド(2号カマド)は北東壁の東南寄りに設置されたものと考えられ、焼土混じりの白色粘土が壁際に残存していた(第10層)。構造等の詳細は不明である。

床面下からはピットは15本検出された。第23b号住居跡の主柱穴配置は不明確である。Pit 8～17が対応するものと考えられることもできるが、配置がずれるため、第23a号住居跡の柱穴とほぼ同位置に存在したとみる方が自然かもしれない。もう1案はPit18～20がほぼ直線的に並ぶことから3本主柱穴と考えることも可能である。貯蔵穴は2号カマドの南側から検出された。長さ90cmの楕円形プランで深さ60cm。

また、第23b号住居跡の内側に焼土混じりの白色粘土堆積層が確認された(第12層)。方形に巡る掘り方状の溝跡が白色粘土層に取り付くように検出された。判然としない部分はあるものの、第23b号住居跡の内側に1軒入れ子状に住居が存在した可能性がある。これを第23c号住居跡とする。

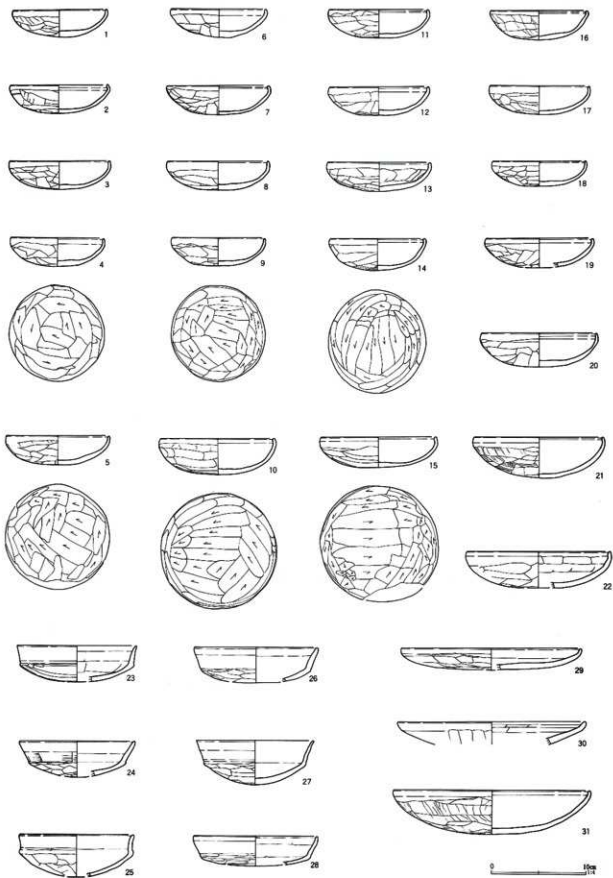
第23c号住居跡の平面形は方形基調と推定され、推定規模は長軸5.94m、短軸5.20m前後となる。

床面は遺存せず詳細不明。カマドは北東壁の南寄りに設置されたものと推定される(3号カマド)。

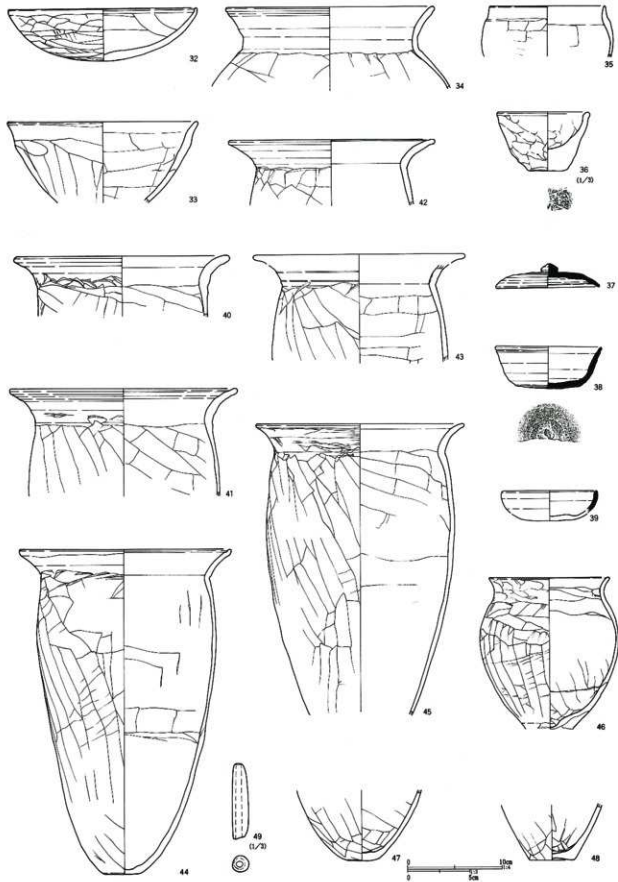
おそらく4本主柱穴配置を採るものと考えられ、Pit

大畚Ⅱ区

第279图 第23号住居跡出土遺物(I)



第280图 第23号住居跡出土遺物(2)



第127表 第23号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	10.0	2.9		AH	1	橙	100	No.2
2	環	10.4	3.0		BCDH	1	橙	80	Pit.2
3	環	10.8	3.0		ABDE	1	橙	90	床下 No.101・102
4	環	10.0	3.0		AH	1	橙	100	貯蔵穴 No.4
5	環	11.0	3.1		ABDE	1	橙	90	貯蔵穴 No.2・5
6	環	10.0	3.0		ABCDH	1	橙	90	No.100
7	環	10.7	3.0		DEH	1	にぶい橙	60	No.92・93・95
8	環	10.6	3.0		ADH	1	橙	50	No.46
9	環	9.8	3.0		AH	1	橙	100	No.3
10	環	12.0	3.8		ADH	1	橙	100	カマド左袖内 No.5
11	環	10.3	3.0		AH	1	橙	60	Pit.1
12	環	10.4	3.0		ADEH	1	橙	100	No.8
13	環	10.7	3.1		ADEH	2	橙	95	No.88
14	環	10.0	3.3		ABCDE	1	橙	100	貯蔵穴 No.1
15	環	12.2	3.2		ABDE	1	橙	95	No.98
16	環	10.3	3.1		BCDH	1	橙	80	カマド左袖内 No.2
17	環	10.5	3.0		ADEH	1	橙	100	No.83
18	環	9.7	2.6		ADH	1	橙	80	No.99
19	環	(11.2)	3.0		AD	1	橙	40	No.97
20	環	(12.2)	3.6		DEH	1	にぶい橙	60	貯蔵穴 No.6
21	環	13.6	4.3		DEH	1	橙	70	カマド
22	環	(15.0)	3.8		BDEG	2	にぶい橙	20	No.16
23	環	(12.6)	3.8		EGJ	2	にぶい黄橙	20	No.71
24	環	(12.2)	3.7		BH	1	にぶい褐	50	No.13
25	環	(12.0)	4.4		ADEH	2	橙	10	
26	環	(13.0)	3.6		DEG	2	にぶい橙	15	Pit.2
27	環	(12.4)	4.7		DH	1	にぶい橙	40	
28	環	(13.0)	3.0		AEG	2	にぶい橙	25	床下
29	皿	(19.0)	2.3		BDEG	2	橙	20	No.49
30	皿	(20.0)	2.4		ADEJ	2	にぶい橙	5	
31	皿	20.8	4.6		ABCDH	1	橙	50	カマド右袖内 No.1・2
32	皿	(20.0)	5.5		ADH	1	橙	25	カマド左袖内 No.1
33	鉢	(20.0)	8.5		ACEIJ	2	にぶい褐	20	No.65
34	壺	(22.2)	8.8		DEH	1	橙	25	No.26
35	小型壺	(12.0)	5.3		DE	2	橙	15	
36	ミニチュア	(7.1)	4.6	3.2	ADGIJ	1	にぶい赤褐	30	No.105
37	須恵蓋	(10.8)	2.8		BFH	1	灰	50	カマド 南比企産
38	須恵環	(11.1)	4.3	6.6	AEI	1	にぶい橙	30	No.50 未野産 底部+体部下端回転ヘラケズリ
39	須恵環	(10.0)	2.3		BEI	2	灰	5	未野産?
40	甕	(23.0)	6.5		BCDH	1	にぶい褐	30	No.73・74
41	甕	(24.0)	11.3		ADEH	1	橙	25	カマドNo.8・36
42	甕	(22.0)	7.0		ADEH	1	浅黄橙	40	No.86
43	甕		10.3		ADEH	1	にぶい橙	25	No.103
44	甕	22.6	34.1		DEH	1	橙	80	カマド左袖内 No.4
45	甕	(22.1)	30.7		DEH	1	にぶい橙	30	No.39・43・44 カマド内No.1・3
46	台付甕	(12.8)	15.9		H	1	橙	55	No.28・29
47	甕		7.4	3.6	DEH	1	にぶい褐	100	カマド左袖内 No.82
48	甕		6.0	(4.8)	ADEH	1	橙	35	カマド床下
49	土鏝	長5.9cm	最大径1.3cm	孔径0.5cm	重量9.79g		にぶい橙床下		

8~17が相当するであろう。柱穴相互の切り合い関係 能性がある。

から少なくとも1回、多い場合には3回建て替えた可 結局、3軒の住居跡が入れ子状に重なっており、小

規模な住居（第23c号住居跡）から第23b号住居跡を経て大型住居（第23a号住居跡）へ順次拡張したものと考えられる。

3軒の住居跡から出土した遺物は、土師器環を主体に、土師器皿・壺・鉢・甕・台付甕、須恵器蓋・環などがある（第279・280図）。出土遺物の大半は第23a号住居跡に伴うもので、床面下から検出されたものには第279図3・28の環がある程度で、第23b・23c号住居跡に確実に伴う資料は少ない。但し、3軒とも一定時間幅の中で建て替えられたもので、大きな時期差を想定する必要もないであろう。

土師器の環は口縁部が内凹または内彎するタイプの北武藏型が主体で（第279図1～2）、少量の模倣環が伴う（23～28）。北武藏型環は口径10cm代の小振りのものが大半で、口径12cm～15cm前後のやや大型のものを少量含む。模倣環は小片が多く住居に伴う資料とみるには検討を要する。土師器皿は口縁部が短く立ち上がるタイプ（第279・280図29～32）で、口縁部が外反するものは含まれていない。

須恵器蓋は口径11cmと小型品で、口径9.5cm前後の環Gと組み合うものと思われる。胎土に白色針状物質が含まれ、南比企産と考えられる。38は須恵器環。環Gとして良いか環Aとすべきか迷うが、底部はへら切り後、底部及び体部下端を回転へラケズリ。口縁部に沈線が1条巡る。末野産である。39は環Gであろう。土師器環類の様相から住居の時期は7世紀後半と考えられる。

第24号住居跡（第281図）

第24号住居跡は、E-15、F-15・16グリッドに位置する。重複する第23・25号住居跡を切り、第1号不明遺構に切られていた。北側に位置する第27号住居跡とはほぼ軸を揃えて隣接している。

平面形は長方形で、規模は長軸4.18m、短軸3.23m、深さ0.05m。主軸方向はN-131°-Eを示す。

床面はほぼ平坦である。カマドは検出されなかった。第1号不明遺構によって削平された可能性が高い。

壁溝は全周する。ピット等の付属施設は検出されな

かった。

出土遺物は非常に少なく、土師器環が2点（第282図1・2）と、ロクロ土師器高台碗（第282図3）が1点検出されたのみである。時期に関しては不明確であるが、重複遺構との関係や第27号住居跡との位置関係からロクロ土師器高台碗が本住居に伴う遺物である可能性が高く、10世紀後半～11世紀の住居跡と推定される。

第25号住居跡（第281図）

第25号住居跡は、E・F-15・16グリッドに位置する。重複する第23号住居跡及び第26号井戸跡を切り、第24・26・27号住居跡に切られていた。

平面形は縦長の長方形で、規模は長軸4.22m、短軸2.85m、深さ0.06mを測る。主軸方位はN-90°-Eを示す。

床面は平坦である。カマドは東壁から2基検出されたが、いずれも上面を第27号住居跡に削平されているため遺存状態は悪い。1号カマドは東壁の南寄りに設置されていた。2号カマドは東壁の中央に設置される。いずれも火床面と掘り方が残存するのみで詳細は不明。断面観察により、2号カマド上面に壁溝と思われる土層が観察され（第1層）、2号カマドから1号カマドに付け替えたものと判断した。

ピットは1本検出された。床面を切っており、遺構に伴うか、より新しい時期の所産である。

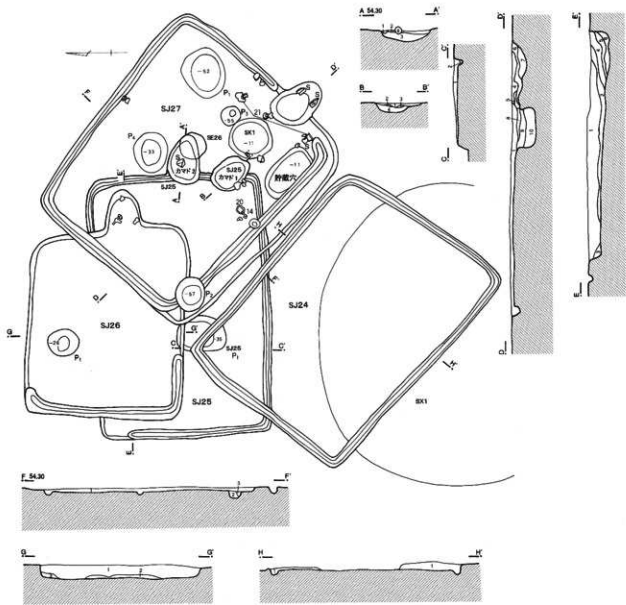
壁溝は北西コーナー一部を除き全周する。

出土遺物は土師器環が1点検出されたのみである（第282図6）。本住居跡と重複する第27号住居跡床面下の破片が接合しており、本住居に帰属するものと考えられる。扁平で平底の土師器環で、体部は無調整、底部はへラケズリされる。時期的には8世紀末葉～9世紀前半頃と考えられる。

第26号住居跡（第281図）

第26号住居跡は、E-15・16グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第25号住居跡を切り、第27号住居跡に切られていた。

平面形は長方形で、規模は長軸3.06m、短軸2.52m、深さ0.23mを測る。主軸方向はN-93°-Eを示す。



SJ 24

1 暗褐色土 ローム粒・赤色粒少量

SJ 25

1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒、炭化物粒少量

2 黒褐色土 ローム粒・炭化物粒少量

SJ 25 カマド I

1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒、炭化物多量、白色粘土層

2 黒色土 ローム粒層 (灰層)

3 赤褐色土 焼土

4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量

SJ 25 カマド II

1 暗褐色土 ローム粒少量 (密着)

2 暗褐色土 ローム粒・焼土粒、炭化物粒多量

3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量

SJ 26

1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック、焼土粒多量

(埋め戻しと思われる)

2 黒褐色土 ローム粒少量

3 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量

SJ 26 カマド

4 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック多量、炭化物粒少量

5 黒色土 焼土粒層 (灰層)

6 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量

SJ 27

1 暗褐色土 ローム粒・赤色粒少量

2 黒褐色土 ローム粒少量

3 黄褐色土 ロームブロック

4 暗褐色土 焼土ブロック・白色粘土多量 (天井部破断)

5 暗褐色土 ローム粒少量、焼土多量

6 黒色土 焼土粒多量 (灰層)

7 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量

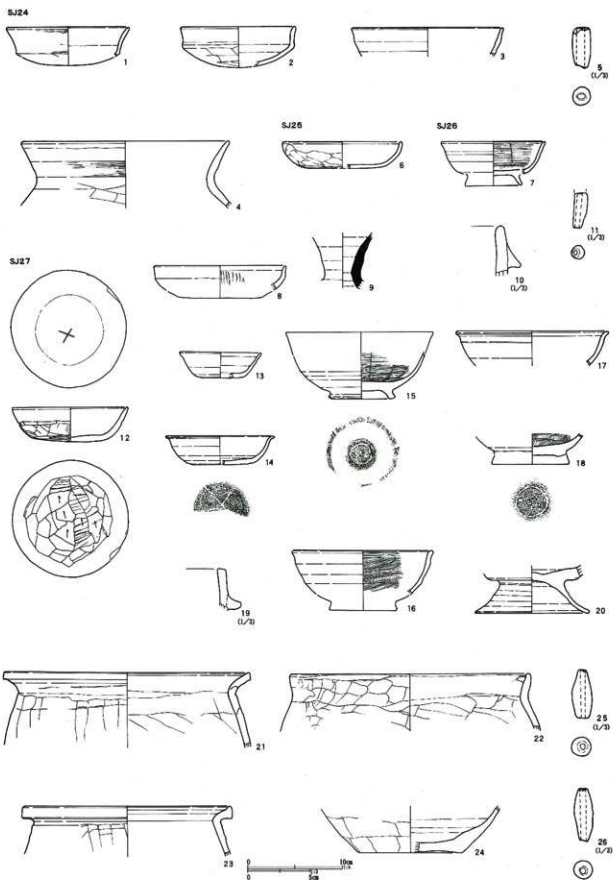
8 黒色土 ローム粒少量

9 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量

10 黒色土 ロームブロック混入

0 2m

第282图 第24~27号住居跡出土遺物



第128表 第24～27号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.0)	3.1		DEH	2	にぶい橙	10	SJ24
2	坏	(12.0)	4.2		BDE	2	明赤褐	10	SJ24
3	高台椀	(16.0)	3.0		ADE	2	橙	10	SJ24
4	壺	(22.0)	7.1		ABDE	2	橙	15	SJ24
5	土錘	長(3.25)cm 最大径1.4cm 孔径0.6cm 重量5.68g 浅黄橙 SJ24							
6	坏	(12.5)	2.8		EH	2	にぶい橙	50	SJ25 体部無調整
7	高台椀	(11.0)	3.4		ADEH	2	にぶい褐	15	SJ26 内面ミガキ、一部黒色 ロクロ土師器
8	坏	(14.0)	2.6		ADE	1	にぶい赤褐	5	SJ26 内面放射暗文
9	須惠瓶		5.8		ABE I	1	青灰	20	SJ26 床下
10	羽釜				ADEH	2	にぶい赤褐	5	SJ26 土師質 赤ロクロ整形
11	土錘	長(3.25)cm 最大径1.1cm 孔径0.3cm 重量2.90g にぶい橙 SJ26							
12	坏	12.2	3.6	7.8	AEH	1	橙	100	SJ27 雲母状微粒子 口縁下に沈線 体部ナデ
13	小皿	(8.5)	2.7		ADEH	2	橙	25	SJ27 ロクロ土師器
14	小皿	(11.5)	3.1	(6.0)	H	2	にぶい橙	40	SJ27 No.11 ロクロ土師器 底部糸切り
15	高台椀		4.9	7.0	ADEH I	2	にぶい褐	70	SJ27 No.3 ロクロ土師器 内面ミガキ+黒色処理
16	高台椀	(14.6)	4.6		DEH	2	にぶい黄橙	10	SJ27 内面ミガキ+黒色処理
17	高台椀	(16.0)	3.6		ADEH	2	橙	15	SJ27 ロクロ土師器
18	高台椀		2.4		EH J	2	黒褐	80	SJ27 ロクロ土師器 内面ミガキ
19	羽釜				ADH	2	黒褐	1	SJ27 土師質 赤ロクロ整形
20	台付鉢か		5.0	12.0	DH	1	にぶい褐	95	SJ27 No.10 雲母状微粒子 ロクロ土師器
21	甕	(26.0)	7.9		AH I J	3	にぶい褐	20	SJ27 No.5 胴部タテズリ
22	甕	(25.6)	6.0		AD	2	にぶい褐	25	SJ27 カマド 胴部～胴部縁な指ナデ
23	甕	(21.9)	5.3		BDEH	2	明黄褐	10	SJ27 胴部タテズリ
24	甕		4.9	(11.0)	DEH J	2	にぶい赤褐	30	SJ27 Pit 1 極めて粗い胎土
25	土錘	長3.3cm 最大径1.5cm 孔径0.4cm 重量9.18g にぶい黄橙 SJ27 確認面							
26	土錘	長4.1cm 最大径1.0cm 孔径0.4cm 重量7.49g 橙 SJ27 カマド							

重複住居よりも掘り込みが深いため床面は遺存していた。全体にゴツゴツした凹凸が顕著で、壁際は全体に軟弱であった。

カマドは東壁の南寄りに設置され、燃焼部は壁を切り込んで構築されていた。底面の掘り込みは浅く、床面と大差ないレベルである。第5層が灰層で、その下面が火床面と考えられる。ピットは1本検出された。上面に貼床されており、住居に直接伴うものではない。

出土遺物はロクロ土師器高台椀(第282図7)、土師器暗文坏(8)、須惠瓶(9)、羽釜片(10)と土錘(11)がある。ロクロ土師器高台椀と羽釜は重複する第27号住居跡に帰属するものと考えられる。暗文坏と長頸瓶は第25号住居跡との関係からみて伴うものはなからう。図化以外のものの中に、カマド内から器壁の薄い武蔵型甕の胴部破片が出土しており、住居の時期としては9世紀代と考えるのが妥当であろう。

第27号住居跡(第281図)

第27号住居跡は、E・F-15・16グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第25・26号住居跡及び第26号井戸跡を切っている。南西壁内側に壁溝が巡ることから、一度建て替え(拡張)した形跡が認められる。

平面形はほぼ正方形で、規模は長軸4.04m、短軸3.64m、深さ0.07mを測る。主軸方向はN-122°-Eを示す。

床面は概ね平坦であるが、ゴツゴツした凹凸が比較的に目立つ。カマド前面から中央部にかけての床面は堅く踏み固められていた。カマドは南東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切り込んで構築され、両側側壁には片岩系の板石が埋め込まれていた。第6層が灰層で、掘り方(第7層)上面が火床面となる。

ピットは4本検出された。Pit 1は深さ52cmと深い。住居に伴う可能性がある。Pit 2は西側コーナー部に位置し、内側の壁溝を切っている。深さ57cmで、住居に伴うカマド対向ピットと考えて間違いのない。壁溝と

の関係から拡張後の住居に伴うものである。Pit 3 は伴うか否か不明。Pit 4 は上面に貼床が施され、住居に直接伴う可能性は低い。

カマド前面から土壌が1基検出された(SK 1)。上面に貼床されており、床下土壌と考えられる。南側コーナー部内側に楕円形の浅い掘り込みが認められた。一応貯蔵穴と考えたが、掘り方の一部と捉えた方が良いかもしれない。

出土遺物は土師器環(第282図12)、ロクロ土師器小皿(13)、ロクロ土師器無台碗(14)、ロクロ土師器高台碗(15~18)、羽釜(19)、台付鉢? (20)、土師器甕(21~24)、土釜(25~26)がある。その他、第24号住居跡出土の高台碗(第282図3)、第26号住居跡出土の高台碗(7)と羽釜(10)が本住居跡に帰属するものと考えられる。

12の土師器環はほぼ完形であるが、出土地点が不明で、遺構に伴うものではない。注記の誤りか。13の小皿は器高が高く、環をスケールダウンしたような形態である。15・16の高台碗は内面ミガキと黒色処理が施される。18の内面はヘラミガキのみ。19の羽釜は土師質で非ロクロ整形である。20は台付鉢か。ロクロ整形される。21・23の甕は口縁部に面をもつ。胴部は縦方向の粗いヘラケズリ調整が施される。22は雑な作りの甕で、頸部以下は雑なナデ整形。ケズリは施されない。

住居の時期は10世紀後半と考えられる。

第28号住居跡(第283図)

第28号住居跡は、E・F-16グリッドに位置する。第29号住居跡及び第27号井戸跡と重複し、本住居跡の方が新しいものと判断された。

平面形は正方形で、規模は長軸4.60m、短軸4.50m、深さは0.35mで比較的深い。主軸方向はN-69°-Eを示す。

床面は概ね平坦で、全体に堅く踏み固められていた。カマドは東壁のほぼ中央に設置される。燃焼部はほぼ壁内におさまり、煙道部は段を以て斜め上方に立ち上がる。第10層が灰層、その下部は掘り方面となる(第11層)。袖は白色粘土を積み上げて構築されていた(第12層)。

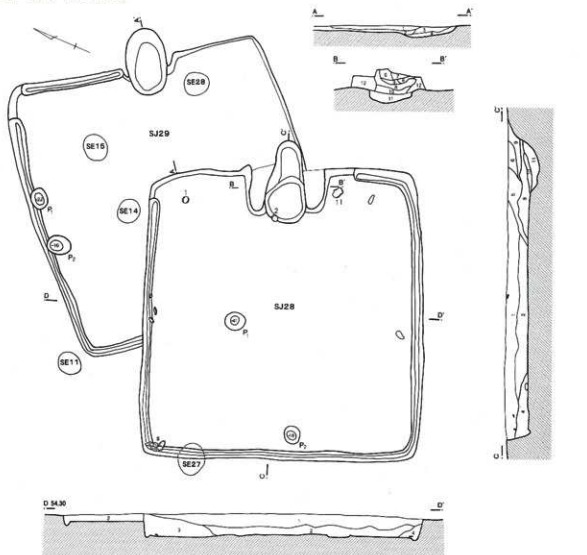
ピットは2本検出された。不規則な配置となるため床面を除去して確認したが、主柱穴に該当するようなピットは検出されなかった。壁溝はカマド周囲を除いて巡っていた。

出土遺物としては土師器環・皿・小型甕・甕・壺、須恵器環・壺が検出された(第284図1~16)。第284図1の土師器環は北東コーナー付近の床面から3cmほど浮いた位置から出土した。2の土師器環はカマド焚口部の床面出土。11の大型壺底部片はカマド右袖の南側から出土した。また、北西コーナー部には棒状の礎が

第129表 第28号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	10.0	2.8		DH	1	橙	100	SJ28 No 3
2	環	9.7	2.8		ABDEH	1	橙	100	SJ28 No 2
3	環	(12.0)	3.4		DEH	2	橙	20	SJ28 床下
4	環	(12.0)	3.9		ADEH	2	黒褐	25	SJ28 黒疵あり
5	環	(17.0)	4.7		ADEH	2	橙	10	SJ28
6	皿	(13.0)	2.4		DEHJ	2	明赤褐	20	SJ28
7	環	(13.0)	3.3		ADEH	2	橙	10	SJ28 比金型環 赤彩残らない
8	環	(12.0)	3.7		AEH	2	黒褐	15	SJ28 内外面黒色処理
9	小型甕	(20.0)	6.4		ADEH	2	にぶい橙	10	SJ28
10	甕	21.2	7.6		AEH	1	にぶい橙	70	SJ28 上層
11	壺		7.3	(12.2)	AH	1	明赤褐	20	SJ28 No 1 底部離れ砂
12	小型甕	(14.4)	4.7		ABDEH	2	にぶい赤褐	25	SJ28
13	須恵環		2.6	(6.0)	E	2	黄灰	35	SJ28 湖西産 底部中心ヘラ切り後ナデ
14	須恵環		3	(8.5)	BEI	2	灰	20	SJ28 末野産
15	須恵環	(8.8)	1.9		BE	1	灰	5	SJ28 産地不明
16	須恵小型壺	(11.0)	3		EI	2	灰	20	SJ28 末野産 口縁部沈線通る

第283図 第28・29号住居跡



SJ28

- 1 暗褐色土 焼土粒・ローム粒や多い
- 2 暗褐色土 ローム粒や多い中に多く含む
- 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
- 4 暗褐色土 ローム粒は少ない
- 5 暗褐色土 ローム粒や多い、白色粘土ブロック・焼土粒少量
- 6 白色粘土 白色粘土層(天井部焼土)
- 7 褐色土 白色粘土少量(焼土)
- 8 白色粘土 焼土層混入(天井部焼土+焼土)
- 9 暗褐色土 白色粘土粒少量(焼土上)

- 10 暗褐色土 灰多量、焼土・高化微粒含む(灰層)
- 11 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒・硬土ブロック・白色粘土
ブロック混入(履下方)
- 12 白色粘土 焼土

SJ29

- 1 暗褐色土 白色粘土ブロックや多い、焼土粒少量
- 2 暗褐色土 ローム粒や多い、焼土少量
- 3 暗褐色土 白色粘土少量、焼土粒多量(天井部焼土)
- 4 褐色土 灰・焼土含む(灰層)

5点まとまって出土した。編物石と思われる。

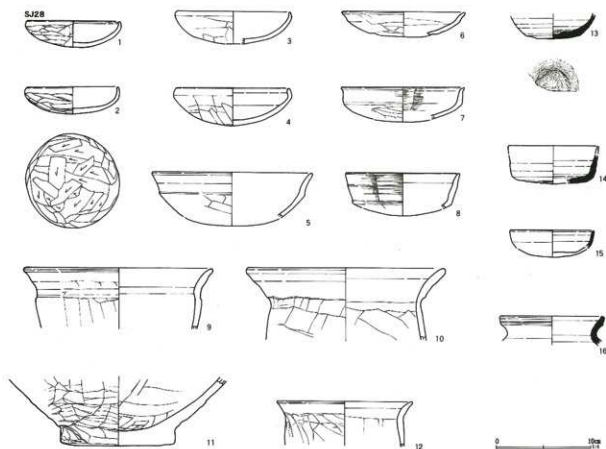
土師器環は7点ある。第284図1～4は北武蔵型環である。1・2は口径10cm前後と小振りである。3・4はやや大きく口径12cm前後である。7は比企型環である。赤彩痕は残らない。混入であろう。8は有段口縁環。6は皿?。13は湖西産の環Gか。底部中心部はヘラ切り後ナデ調整、その周辺部は回転ヘラケズリ調整されている。ヘラケズリは体部には及ばない。14は

末野産の環G。口縁部を欠き、底部は回転ヘラケズリ調整される。15は環Gまたは環H蓋である。産地不明。素地土は細かい。16は末野産の小型甕である。住居跡の時期は7世紀後半と考えられる。

第29号住居跡 (第283図)

第29号住居跡は、E-16・17グリッドに位置する。第28号住居跡と重複し、本住居跡の方が古く、南コーナー付近は28号住居跡によって削平されていた。ま

第284図 第28号住居跡出土遺物



た、第14・15・28号井戸跡は、柱穴の有無を確認するため、床面を除去した際検出されたことから、本住居跡よりも古いものと考えられる。

平面形は正方形で、規模は一辺4.44m、深さは0.05m以下と非常に浅い。主軸方向はN-62°-Eを示す。

床面は、カマド前面から住居中央部に至る部分が比較的堅く踏み固められていた。一方、壁際は相対的に軟弱であった。

カマドは北東壁の中央からやや東南寄りに設置されている。燃焼部は壁を切り込んで構築されていた。遺存状態は悪く、袖部は検出されなかった。埋土は第4層が灰層である。

ピットは2本北西壁際に検出されたが、住居に伴う柱穴ではない。

出土遺物はなく、住居の時期は不明確。第28号住居跡との関係から7世紀後半以前という限定ができるのみである。

第30号住居跡 (第285図)

第30号住居跡は、F・G-14グリッドに単独で位置する。平面形は長方形で、規模は長軸2.96m、短軸2.16m、深さ0.12mを測る。遺構の主軸方位はN-173°-Wを示す。

床面はやや凹凸が顕著で、特に堅く踏み固められた箇所はない。1号カマドは、南東コーナーに設けられていた。燃焼部はコーナーを斜方向に切り込んで掘り込まれ、細長い煙道部に続く。カマドの主軸方向はN-152°-Eを示す。

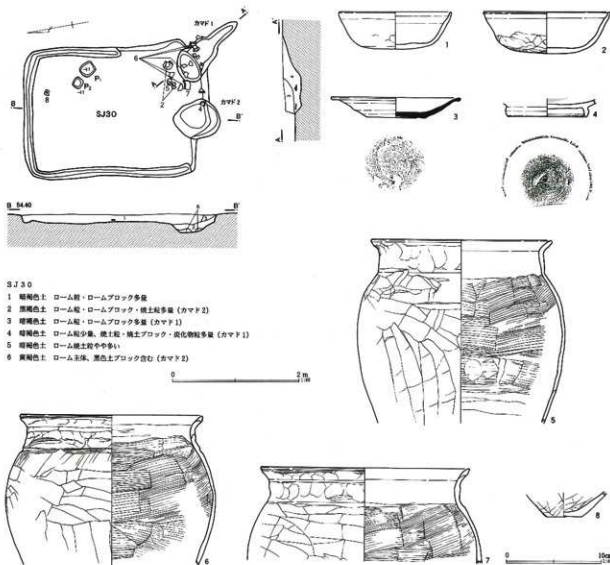
2号カマドは、南壁の西寄りに設置される。土塊状の形態で、埋土には焼土が多量に含まれていた。壁から内側の部分は貼床が施されていたことから、本カマドから1号カマドに付け替えられたものと考えられる。ピットは2本検出されたが、おそらく中世の所産と思われる、遺構に伴うものではない。

出土遺物は少なく、土師器・環・甕、須恵器皿、灰釉

陶器高台碗が検出された(第285図)。土師器の環(1・2)は深身で、体部は無調整(ナデ)、底部をヘラケズリ調整するタイプである。3は須恵器の皿で、末野産である。4は灰釉陶器高台碗で、口縁部を欠いている。底部は回転ヘラケズリ、高台部は三日月状を呈し、し

っかりした作りである。灰釉は刷毛塗りと思われる。東濃産。光ヶ丘1号窯式に含まれるものであろう。土師器甕(5-8)はいわゆる「コ」の字状口縁装で、内面は木口状工具によるナデが施されている。住居の時期は9世紀後半～末葉と考えられる。

第285図 第30号住居跡・出土遺物



S30

- 1 暗褐色土 ローム質・ロームブロック多量
2 暗褐色土 ローム質・ロームブロック・焼土粒多量(カマド2)
3 暗褐色土 ローム質・ロームブロック多量(カマド1)
4 暗褐色土 ローム粒少量、焼土粒・焼土ブロック・炭化物粒多量(カマド1)
5 暗褐色土 ローム質土粒やや多い
6 黄褐色土 ローム多量、黒色土ブロック含む(カマド2)

0 2m

第130表 第30号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(11.8)	3.9	(7.0)	ABDE	2	にぶい赤褐	30	
2	環	(13.4)	4.3		AD	1	明赤褐	60	No.2・5
3	須恵皿	13.8	2.1	6.2	BIJ	1	にぶい褐	70	末野産
4	灰釉高台碗		1.9	8.4	H	1	灰白	70	No.12 灰釉刷毛塗り 東濃産 光ヶ丘1号窯式
5	甕	(19.0)	19.2		ADE	1	明赤褐	50	No.3・6・13・15 カマド2
6	甕	19.4	15.8		ADH	1	にぶい赤褐	50	2号カマド No.6・8・9・16
7	甕	(22.2)	9.8		EH	1	にぶい褐	20	No.7
8	甕		2.6	3.8	DE	1	にぶい橙	70	No.1 黒斑あり

第31号住居跡 (第286図)

第31号住居跡は、F・G-13・14グリッドに位置する。住居西半部は調査区外に延びる。中央～東壁部は第22号井戸跡に切られていた。また、重複する第2号掘立柱建物跡は第1号土壌に切られており、本住居跡よりも古い可能性が高い。

平面形は方形系と推定され、規模は長軸3.70m、短軸1.57m (現在長)、深さ0.03mを測る。主軸方向はN-0°を示す。

床面は確認段階では露出していた。概ね平坦で堅く締まっていた。カマドは検出されなかった。

ビットは1本検出された。土壌は南東コーナー内側に1基ある。上面は貼床されていたことから、掘り方乃至床下土壌と思われる。

出土遺物は少なく、環と羽釜が各1点出土したのみである(第286図)。第286図1は土師質の環である。形態的には須恵器無台環とほとんど変わらない。外面の

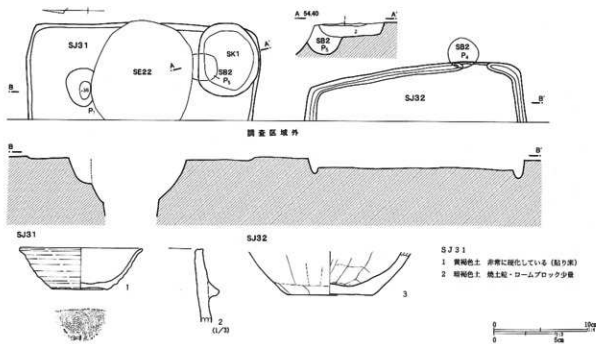
ロクロ目は顕著であるが、内面は平滑。酸化焙焼成、素地土は細かく、末野産の胎土とは異なる。2は土師質の羽釜である。ロクロ整形された可能性があるが、あまり明確とはいえない。重複する第22号井戸跡に帰属するものかもしれない。住居の時期は不明確であるが、環の様相及び重複関係から9世紀後半～10世紀前半にはおさまるであろう。

第32号住居跡 (第286図)

第32号住居跡は、G-13グリッドに位置する。床面の大半は調査区外に延び、遺構の詳細は不明である。第2号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡の方が新しい。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸3.46m、短軸0.95m (現在長)、深さ0.18mを測る。主軸方向はN-7°-Wを示す。

床面は平坦で全体に堅く締まっていた。カマド・ビットは検出されなかった。壁溝は東壁に一部途切れる箇所があるが、その他は巡っていた。



第131表 第31・32号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師質環	(13.1)	4.3	5.8	A E H	1	にぶい褐	45	SJ31 酸化焙焼成 胎土細かい
2	羽釜				A B E I J	2	灰黄褐	10	SJ31 土師質 ロクロ整形?
3	羽釜か		4.6	(9.0)	B E J	2	灰褐	30	SJ32 胴部ヘラナゲ

出土遺物は非常に少なく、羽釜底部かと思われる破片が検出されたのみである(第286図3)。時期は不明確であるが、10世紀中葉以降であろう。

第33号住居跡(第287図)

第33号住居跡は、G・H-13・14グリッドに位置する。重複する第24号土壌に北東コーナー部上面を削平されていた。住居西半は調査区外に延び、遺構の詳細は不明である。

平面形は方形系と推定され、規模は長軸4.49m、短軸1.52m(現在長)、深さ0.29mを測る。主軸方向はN-91°-Eを示す。

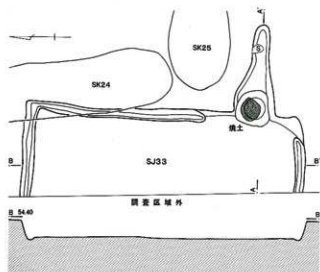
床面は平坦で堅く踏み固められている。埋土にはロームブロックが多量に含まれ、廃絶段階で埋め戻された可能性がある。

カマドは東壁の南端に設置されていた。燃焼部から煙道部は壁を切り込んで構築され、底面はほぼ平坦で、床面との段差はあまりみられなかった。焚口部付近の底面と、燃焼部から煙道部に掛けての両側壁は部分的に被熱していた。壁溝はカマド周辺を除き巡っていた。ピットは検出されなかった。

出土遺物はロクロ土師器高台碗が1点検出されたのみである(第287図1)。

第287図1はロクロ土師器高台碗である。内面ヘラミガキと黒色処理がなされている。底部には糸切り痕

第287図 第33号住居跡・出土遺物



が残る。実測図は口縁部片と底部との合成図である。推定口径14.1cm、器高6.6cm、高台径8.0cm。胎土に赤色粒子・石英・角閃石・白色粒子を含み、焼成は普通である。色調はにぶい橙色。

住居の時期は10世紀後半以降と推定される。

第34号住居跡(第288図)

第34号住居跡は、調査区西端のH-13グリッドに位置する。重複以降との新田関係は、第35号住居跡を切り、第1号溝跡に切られていた。住居の大半は調査区外に延び、遺構の詳細は不明である。

平面形は方形系と推定され、規模は長軸2.88m、短軸0.76m(現在長)、深さ0.07mを測る。主軸方向はN-13°-Wを示す。

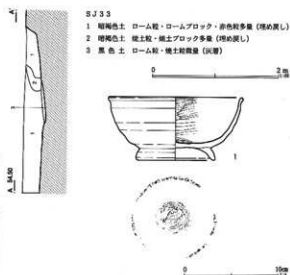
床面は平坦である。カマド・ピット等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は検出されず、住居の時期も不明確であるが、重複遺構との関係から10世紀末葉以降と考えられる。

第35号住居跡(第288図)

第35号住居跡は、調査区西端のH・I-13・14グリッドに位置する。重複する第34号住居跡に切られていた。また、西壁部は調査区外に延び、遺構の詳細は不明である。

平面形は方形系と推定され、規模は長軸3.04m、短



軸2.40m（現在長）、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-98°-Eを示す。

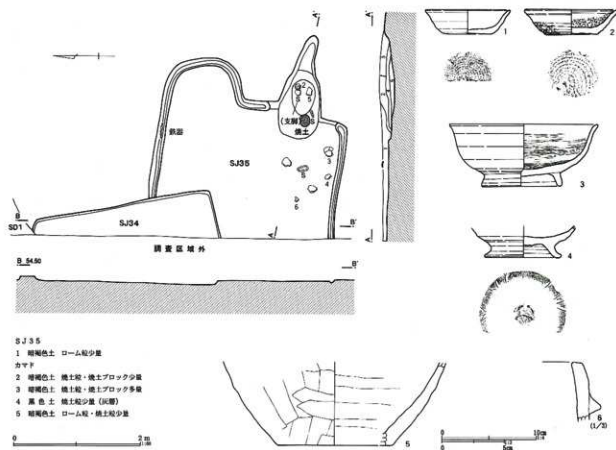
床面は概ね平坦である。カマド前面から中央部の床面は堅く踏み固められていた。カマドは東壁の南端に設置されていた。燃焼部から煙道部は壁を切り込んで構築され、底面はほぼ平坦、床面との段差はあまりない。燃焼部から煙道部にかけての側壁は強く被熱していた。また、焚口部南壁内側に片岩系の板石が埋め込まれた状態で残されていた。焚口部を画する袖石と考えられる。袖石の北側底面は被熱していた。燃焼部奥壁側には石製支脚が居えられた状態で遺存していた。

第288図 第34・35号住居跡・出土遺物

カマドのある東壁北半には半円状の張り出し部が検出された。壁から東側に約65cm程延びており、底面は床面と一体化している。壁溝が張出部に沿って巡ることから屋内の一部として機能していたことは間違いないだろう。

壁溝はカマドを除き巡っていた。

出土遺物はロクロ土師器小皿・高台碗、羽釜、鉄器がある（第288図）。第288図2の小皿はカマド内から出土し、内外面にタール状の有機物が付着していた。3の高台碗は内面にヘラミガキ調整が施される。住居の時期は10世紀末葉～11世紀初頭頃と思われる。



5 J 3 5

1 暗褐色土 ローム粒少量

カマド

2 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック少量

3 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック多量

4 黒色土 焼土粒少量（灰層）

5 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量

第132表 第35号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	小皿	(9.0)	2.5	(5.0)	ADEIJ	3	橙	35	ロクロ土師器
2	小皿	9.8	2.5	5.6	ADHJJ	1	にぶい橙	100	No.1 内外面にタール状物質付着 ロクロ土師器
3	高台碗	(15.6)	6.6	8.2	ADHJJ	1	にぶい橙	85	No.4 内面ヘラミガキ ロクロ土師器
4	高台碗		3.4	7.8	ADHJJ	1	にぶい黄橙	80	No.5 ロクロ土師器
5	羽釜		8.7	(12.0)	ADEIJ	1	橙	15	No.26と同一個体か
6	羽釜		4.7		ADEH	2	にぶい橙	10	No.7 土師質非ロクロか

第36号住居跡 (第289図)

第36号住居跡は、G・H-14・15グリッドに位置する。第1号溝跡とそれに伴う小ピットに上面を削平されていたが、遺構の遺存状態は比較的良好い。

平面形は正方形で、規模は長軸3.71m、短軸3.41m、深さ0.30mを測る。主軸方向はN-87°-Eを示す。

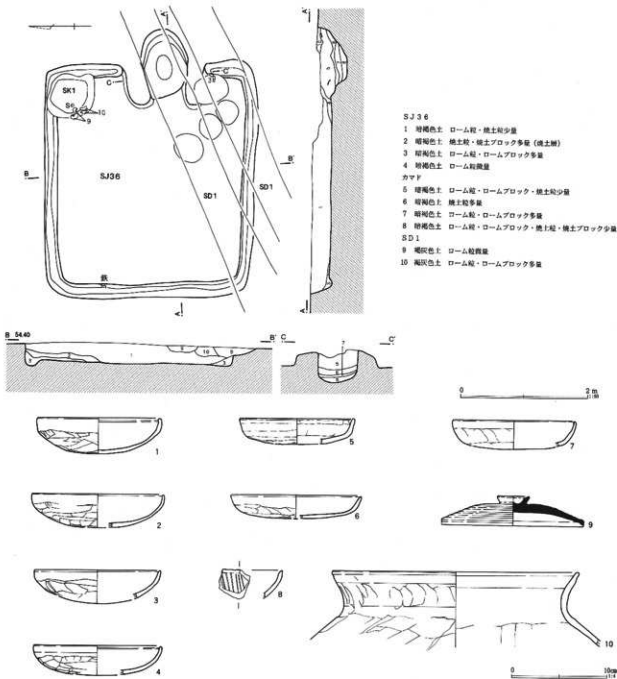
床面は全体に平坦で、堅く踏み固められていた。埋土は暗褐色土を基調とするが、北壁中央付近の中層に

は焼土が投げ込まれたような状態で堆積していた。

カマドは東壁の中央からやや南寄りに設置されていた。燃焼部は壁を切り込んで構築され、軸はローム混じりの褐色粘土を主体に構築されていたが、あまり判然としたものではなかった。第7・8層は掘り方埋土と思われ、第6層下面が火床面と考えられる。但し、灰層は残されていなかった。

北東コーナー部には土城が1基検出された。隅丸方

第289図 第36号住居跡・出土遺物



第133表 第36号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	地成	色調	残存率	備考
1	坏	13.0	3.7		BDH	1	にぶい赤褐	50	
2	坏	(13.9)	3.5		DEH	2	明赤褐	25	
3	坏	(13.4)	3.5		ADH	1	橙	60	カマド No.3
4	坏	(13.6)	3.0		ADH	1	にぶい褐	20	
5	坏	(13.0)	2.7		ADEG	1	橙	30	
6	坏	(13.8)	2.5		DH	1	にぶい赤褐	20	体部無調整
7	坏	(12.8)	2.7		DEH	1	橙	10	体部無調整
8	坏		3.0		ACDEH	1	橙	5	内面放射暗文
9	須恵蓋	(15.2)	2.9		EFH	1	にぶい黄橙	80	No.1 南北企産
10	壺	(26.0)	7.9		ADEG	1	橙	20	No.2

形で直径75cm、深さは13cmと浅い。貯蔵穴の可能性が
あろう。壁溝はカマドを除きほぼ全周する。

出土遺物は土師器坏・壺、須恵器蓋、鉄器がある(第
289図)。第289図3の土師器坏はカマド右袖の外側か
ら出土した。9の須恵器蓋と10の土師器壺は第1号土
壇の壁際、ほぼ床面の高さから出土した。土師器坏は
口縁部が丸味をもって直立し、丸底風の底部のもの(第
289図1~4)と、扁平な器形で底部が平底風のもの(第
289図5~7)の2タイプがある。9の須恵器蓋は高台
状のつまみをもつもので、南北企産である。土師器の
坏に新しいものが含まれている可能性があるが、住居
の時期は8世紀前半~中頃と考えておきたい。

第37号住居跡 (第290図)

第37号住居跡は、A-18グリッドに位置する。第1
号土壇の上面に床を張って住居を構築していたが、狭
長な調査区に制約され、遺構の詳細は不明である。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸3.00
m、短軸2.32m(現在長)、深さ0.02mを測る。主軸方
向はN-102°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。カマドは東壁の南端に設置
されているが、調査区外に延び全容は不明である。燃
焼部は壁外に掘り込まれ、内部には片岩系の板石が散
乱していた。カマド右袖には袖石が据えられた状態で
遺存していた。

ピットは2本検出されたが、伴うか否かは不明であ
る。土壇は1基、カマド前面から検出された。上面に
貼床されていたことから、床下土壇と考えられる。

出土遺物は少なく、カマド内からクロコ土師器小皿

(第291図1・2)とクロコ土師器高台碗(3)が検出
されたのみである。小皿はやや器高が高く、坏を小型
化したような形態である。住居の時期は10世紀後半と
考えられる。

第38号住居跡 (第290図)

第38号住居跡は、A-18グリッドに位置する。北壁
部は調査区外に延び、遺構の全容は不明である。重複
遺構との新旧関係は第39号住居跡を切り、第36・66号
土壇に切られている。

平面形は方形系と推定され、規模は長軸3.80m、短
軸2.68m(現在長)、深さ0.21mを測る。主軸方向は
N-90°-Eを示す。

床面は、下面から検出された第39号住居跡の床面直
上、またはほぼ同一面に作られ、全体に非常に強く踏
み固められていた。

カマドは東壁の南端に設置される。燃焼部は壁を切
り込んで構築されているが、先端は第36号土壇に壊さ
れており詳細は不明である。燃焼部側壁は強く被熱し、
南側側壁には片岩系の板石が据えられた状態または、
崩落した状態で検出された。北側のそれは全て崩落し
ていた。燃焼部底面には石製支脚が据えられた状態で
遺存していた。

ピットは1本南西コーナー部から検出された。直径
50cm、深さ70cm程度、住居に付属するカマド対向ピ
ットと考えられる。

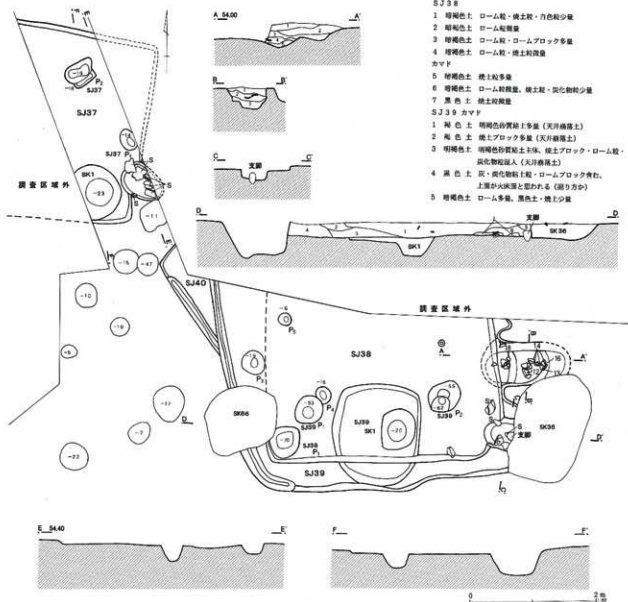
出土遺物はクロコ土師器小皿・高台碗、土師器坏・
壺、須恵器坏などがある(第291図4~11)。7はクロ
コ土師器小皿で底部は回転糸切り。8~10はクロコ土

師器高台帳。9と10は内面ヘラミガキと黒色処理が施されている。胎土と色調が類似し、同一個体かもしれない。4・5の土師器環、6の須恵器環は混入品。重複する第39号住居跡に帰属する可能性が高い。11の竈はカマド内出土で本住居跡に伴う遺物である。住居の時期は10世紀後半～11世紀と考えられる。

第39号住居跡 (第290図)

第39号住居跡は、A-18グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第40号住居跡を切り、第38・49号住居跡、第36・66号土壌に切られていた。北壁部は調査区外に延びるため、遺構の全容は不明である。

第290図 第37～40号住居跡

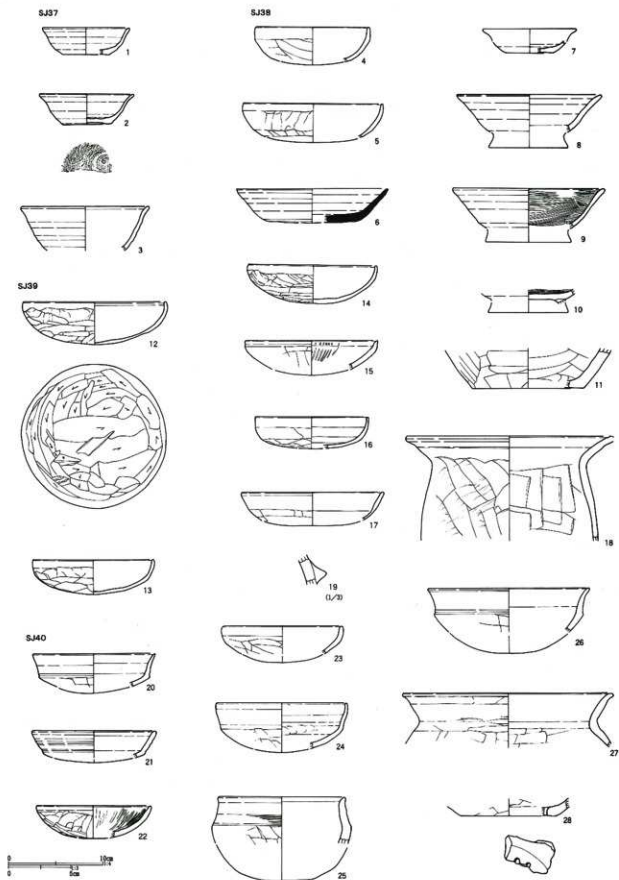


平面形は方形系と推定され、規模は長軸4.68m、短軸3.48m (現在長)、深さ0.25mを測る。主軸方向はN-83°-Eを示す。

床面は第38号住居跡床面直下に検出され、第1号土壌を含めた南壁部周辺を除くと非常に堅く踏み固められていた。カマドは東壁に設置されている。燃焼部は壁を切り込んで構築され、袖部は白色粘土を積み上げて構築されていた。底面は段をもち、第4層上面が火床面に相当するものと考えられる。

ピットは5本検出された。Pit 1・2は住居に伴う主柱穴と考えられる。土壌は1基南壁際に検出された。

第291图 第37~40号住居跡出土遺物



第134表 第37～40号住居跡出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	小皿	(9.2)	2.8	(5.0)	H	2	にぶい橙	25	SJ37 カマド ロクロ土師器
2	小皿	(10.1)	3.2	5.0	DEH	2	橙	35	SJ37 カマド ロクロ土師器
3	高台碗	(13.6)	4.6		ADEH	1	明赤褐	15	SJ37 カマド ロクロ土師器
4	環	(12.0)	3.6		DEH	2	橙	15	SJ38
5	環	(14.8)	3.6		DEH	2	橙	10	SJ38
6	須恵環	(16.0)	3.5	10.5	BEI	2	灰	10	SJ38 未野または壽岡産 白色粒子多
7	小皿		1.2	(5.0)	AE	2	にぶい橙	5	SJ38 ロクロ土師器
8	高台碗	(15.2)	3.9		AE	2	にぶい黄橙	40	SJ38 カマド ロクロ土師器
9	高台碗	(16.0)	4.1		DHI	1	にぶい褐	30	SJ38 ロクロ土師器 内面ミガキやや黒ずむ
10	高台碗		1.5		DEH	2	にぶい褐	30	SJ38 内面ミガキ+黒色処理 9と同一個体か
11	甕		4.2	(12.0)	BEJ	2	にぶい赤褐	25	SJ38 カマド
12	環	15.0	4.5		DH	1	橙	100	SJ39 No.5・6
13	環	12.7	3.6		BDEH	1	橙	60	SJ39 カマド No.10
14	環	13.5	4.1		ABDEH	1	橙	80	SJ39 カマド No.7・9・11
15	環	(14.0)	3.1		DE	1	明赤褐	10	SJ39 Pit 1 内面放射状暗文
16	環	(12.0)	3.3		DE	2	にぶい橙	30	SJ39 カマド No.8
17	環	(15.0)	3.0		AE	2	橙	25	SJ39 SK 1
18	甕	(22.1)	11.0		AH	1	橙	20	SJ39 カマド No.1
19	羽釜		2.3		ABDE	2	暗赤褐	1	SJ39 SK 1 土師質
20	環	(13.0)	3.5		ADEH	3	橙	10	SJ40
21	環	(13.0)	2.8		EH	2	灰褐	10	SJ40
22	環	(12.0)	3.3		ADEH	1	明赤褐	40	SJ40 内面放射状暗文
23	環	(12.4)	2.9		DEH	2	明赤褐	20	SJ40
24	環	(13.7)	4.8		EH	2	橙	10	SJ40
25	鉢	(17.0)	5.0		ADEH	3	橙	10	SJ40
26	鉢	(17.1)	4.6		AH	1	橙	5	SJ40
27	壺	(22.3)	5.7		ADEHJ	1	明赤褐	15	SJ40
28	甕		1.8	(10.0)	DEH	3	にぶい橙	10	SJ40 底面に小孔2ヶ

上面はやや軟弱であるが、貼床を確認したため、床下土壌と判断した。床面からの深さ25cm程である。

出土遺物は少なく、土師器の環・甕、羽釜が検出された(第291図12～19)。土師器の環(12～14・16)はカマド内に落ち込んだような状態で出土した。羽釜(19)は第38号住居跡に帰属するであろう。また、第38号住居跡から検出された土師器環(4・5)と須恵器環(6)は本住居跡に伴う可能性が高い。

土師器環は内湾気味または直立口縁で、丸底形態である。須恵器環は底部と体部下端が回転ヘラケズリ調整される。住居の時期は8世紀初頭前後と考えられる。

第40号住居跡(第290図)

第40号住居跡は、A-18グリッドに位置する。住居の大半は調査区外にあり、また、重複する第39号住居跡に切られており、遺存状態は極めて悪い。

平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸1.80

m、短軸0.42m、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-30°-Wを示す。

床面は平坦である。カマド・ピット等の付属施設は検出されなかった。壁溝は西壁部に検出された。

出土遺物は土師器環・壺・甕等がある(第291図20～28)がいずれも小片である。土師器環はいわゆる模倣環(20・21・24・26)と北武藏型環(23)、暗文環(22)がある。後2者は混入品と思われ、重複する第39号住居跡に帰属するものかもしれない。模倣環もタイプが異なるものが混在し、あまり良好な資料とはいえない。時期的には不明確であるが、7世紀前半代中心か。

第41号住居跡(第292図)

第41号住居跡は、A-18、B-18・19グリッドに位置する。重複する第42・43号住居跡に切られている。

平面形は正方形で、規模は長軸3.98m、短軸3.77m、深さ0.17mを測る。主軸方向はN-91°-Eを示す。

床面はやや起伏があり、住居中央付近が堅く、壁際がやや軟弱であった。カマドは東壁のほぼ中央に設置される。燃焼部は壁を切り込んで構築され、袖は黄灰色粘土を積み上げて構築されていた。但し、右袖は重複造構に壊されており、遺存していなかった。底面は皿状に掘り込まれているが、火床面はほぼ平坦で、下部は埋め戻されている（掘り方）。

ピットは検出されなかった。壁溝はカマドを除き全周する。

出土遺物は土師器環・皿・甕・壺・甔・磁石がある（第293図1～15）。5の環は住居中央付近、床面よりも約3cm浮いた位置から出土した。6はカマド前面の床面から出土。12の甔は住居北東部と北西部の破片が接合した。床面から数cm浮いている。

第293図1・2は土師器皿か。3は模倣環。4～8・10・11は北武蔵型環である。9は比企型環と思われる。12の甔は胴部ヘラミガキ調整が施される。3・9は混入である。住居の時期は8世紀前半と考えられる。

第42号住居跡（第292図）

第42号住居跡は、B-18グリッドに位置する。重複造構との新旧関係は、第41号住居跡・第59号土壌を切り、第43号住居跡に切られていた。

平面形は長方形と推定され、規模は長軸3.46m、短軸2.10m、深さ0.18mを測る。主軸方向はN-100°-Eを示す。

床面は第41号住居跡床面の直上に貼床を施して構築されていた。細かい凹凸が顕著で、全体に堅く締まっていた。カマド・ピット等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器環類と須恵器環がある（第293図16～20）。小片が多く、住居に確実に伴う遺物を抽出することは難しい。16は扁平で弱い丸底形態の北武蔵型環である。19は南比企産の須恵器環である。出土遺物はいずれも8世紀前半代と考えられ、重複する第41号住居跡と大きな時期差はみられない。住居跡の時期は重複造構との関係から8世紀前半以降10世紀後半以前という限定しかできない。

第43号住居跡（第292図）

第43号住居跡は、B-18・19グリッドに位置する。重複する第41・42号住居跡を切り、第33号土壌に切られていた。第44号住居跡との関係は、床面の遺存状態から一応本住居跡の方が新しいと判断したが、あまり明確とはいえない。

平面形は正方形で、規模は長軸2.95m、短軸2.55m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-98°-Eを示す。

床面は全体に堅く踏み固められていた。カマドは検出されなかった。おそらく当初から存在しなかった可能性が高い。ピットその他の付属施設も検出されなかった。

出土遺物はロクロ土師器皿・高台椀、土師器甕、暗文環がある（第293図21～24）。21はロクロ土師器小皿である。器高はやや高く、底部は回転糸切りされる。22はロクロ土師器高台椀である。内面ヘラミガキと黒色処理が施される。24は混入である。住居の時期は10世紀後半と考えられる。

第44号住居跡（第292図）

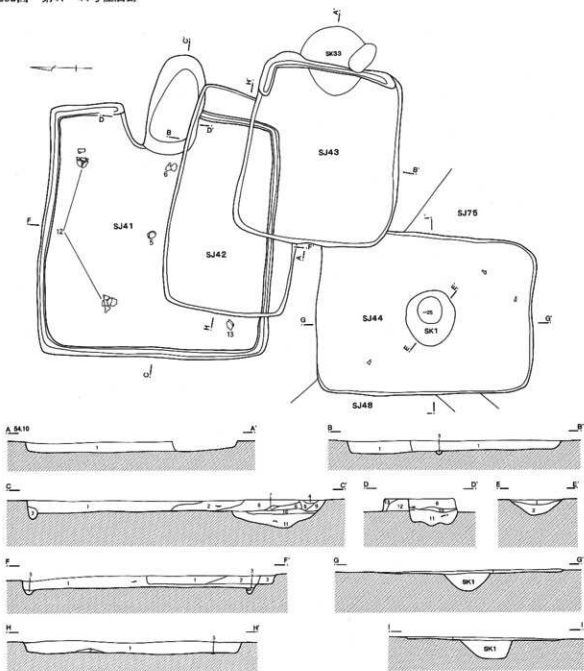
第44号住居跡は、B-18グリッドに位置する。重複する第48・75号住居跡を切っていた。第43号住居跡との新旧関係は本住居跡の方が古いものと判断したが、不明確であった。

平面形は長方形で、規模は長軸3.44m、短軸2.46m、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-0°を示す。

掘り込みが浅く、床面は北壁部から住居中央付近にかけて部分的に貼床が残るのみである。カマドは削平されており遺存しない。

ピットは検出されなかった。土壌は1基中央付近に検出された（SK1）。上面に貼床されており、埋土は焼土粒子を多量にも含む、ロームブロック混じりの暗褐色土で埋められていた。住居に伴う床下土壌と考えられる。

出土遺物は少なく、ロクロ土師器小皿（第293図25）とロクロ土師器高台椀（26）が検出されたに留まる。ロクロ土師器小皿は器高がやや高く3.1cm、底部は回転糸切りである。高台椀は口縁部と底部を欠く。内面



SJ41

- 1 黒褐色土 ローム殻・焼土粒少量
- 2 黒褐色土 ローム殻・ロームブロック・焼土粒少量
- 3 黒褐色土 ローム殻・ロームブロック多量

カマド

- 4 黒褐色土 焼土殻・焼土ブロック多量
- 5 黒褐色土 焼土殻多量
- 6 黒褐色土 ローム殻・焼土殻・炭化物少量
- 7 暗褐色土 焼土殻多量
- 8 黒褐色土 焼土殻多量
- 9 黒褐色土 ローム殻・焼土粒少量
- 10 黒色土 焼土粒少量(灰層)
- 11 暗褐色土 ローム殻・焼土粒多量、炭化物残渣(カマド裏り方)
- 12 褐色土 黒灰色粘土 ロームブロック多量(カマド基礎層上)
- 13 暗褐色土 焼土ブロック焼土(カマド基礎土)

SJ42

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック・焼土粒少量
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量(埋め戻し)
- 3 暗褐色土 ロームブロックやや多い

SJ43

- 1 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック・赤色粒少量

SJ44

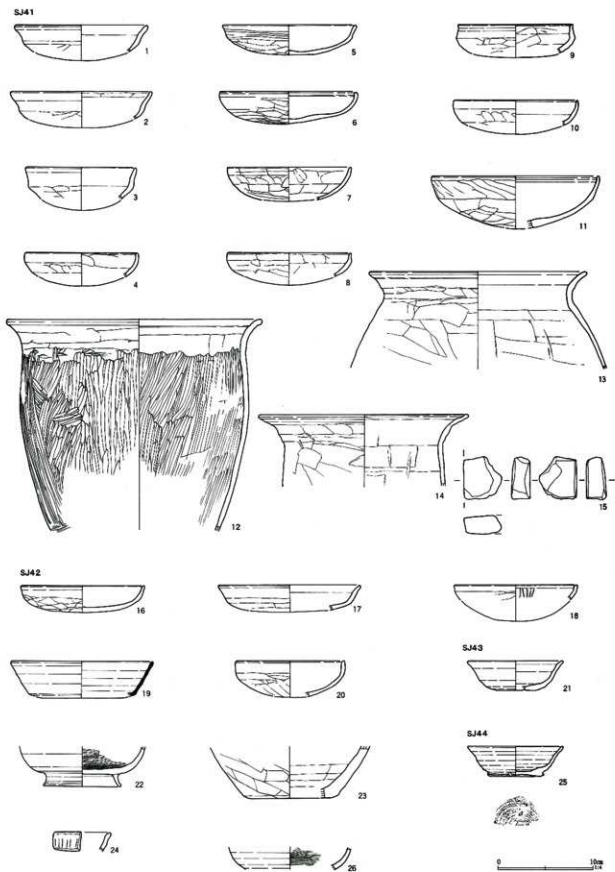
- 1 暗褐色土 ローム殻・赤色粒少量

SJ44 SK1

- 1 暗褐色土 ローム粒少量・焼土粒多量、床面についている
- 2 黒褐色土 ローム殻・ロームブロック少量

0 2m

第293图 第41~44号住居跡出土遺物



第135表 第41～44号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	皿	(14.0)	2.8		BDE	2	にぶい橙	5	SJ41
2	皿	(15.0)	2.8		BDH	1	にぶい橙	10	SJ41
3	環	(11.7)	3.3		EH	2	にぶい黄橙	5	SJ41
4	環	(11.8)	2.5		BDE	1	橙	5	SJ41 口縁下に無調整部残す
5	環	14.1	3.1		ADH	1	橙	75	SJ41 No.2
6	環	14.4	3.9		ADEH	2	明赤褐	70	SJ41 No.1
7	環	(13.0)	3.4		DEH	1	にぶい赤褐	15	SJ41
8	環	(12.9)	2.5		BDE	2	橙	5	SJ41 口縁下に無調整部あり
9	環	(13.0)	3.0		DEF	1	橙	5	SJ41 比企型環 赤彩不明
10	環	(13.0)	2.6		BDE	2	にぶい橙	10	SJ41体部上半無調整
11	環	(17.6)	5.4		BDH	2	橙	30	SJ41
12	甌	26.2	22.2		DEH	1	にぶい赤褐	35	SJ41 No.5・6
13	壺	(23.2)	10.2		ABDH	2	にぶい黄褐	5	SJ41 No.3
14	甕	(22.2)	7.5		DEG	1	にぶい黄橙	5	SJ41 カマド
15	磁石	長4.5cm	最大幅4.0cm	厚さ2.0cm	重量44.13g		SJ41	床下	
16	環	(13.0)	2.8		BDH	1	明赤褐	50	SJ42
17	皿	(15.0)	2.6		ABD	2	にぶい橙	10	SJ42
18	環	(13.0)	1.6		DE	2	明赤褐	5	SJ42 内面放射状暗文
19	須恵環	(15.0)	3.7		BCE F J	1	灰白	10	SJ42 南北企産
20	環	(11.4)	3.7		BDE	1	にぶい橙	10	SJ42
21	小皿	(10.2)	3.1	(4.2)	ABDEH	2	にぶい橙	20	SJ43 ロクロ土師器
22	高台椀		4.2	(8.0)	ABDEH	1	にぶい黄橙	40	SJ43 ロクロ土師器 内面ミガキ+黒色処理
23	甕		5.4	(8.2)	ABDEH	2	橙	30	SJ43外面ケズリ+ナデ
24	環		2.0		DE	2	明赤褐	5	SJ43 暗文
25	小皿	(10.2)	3.1	(5.2)	ADH	2	橙	30	SJ44 ロクロ土師器
26	高台椀		2.4		ADEG	2	にぶい黄橙	5	SJ44 ロクロ土師器 内面ミガキ+黒色処理

はヘラミガキと黒色処理が施されている。住居の時期は10世紀後半と推定される。

第45号住居跡 (第294図)

第45号住居跡は、A・B-17グリッドに位置する。第46号住居跡の床下からカマドが検出された。遺構の大半は調査区外に延びており、詳細は不明とせざるを得ない。

平面形は方形系と推定されるが、規模は不明である。深さは第46号住居跡の床面から6cm程掘り込まれている。主軸方向はN-102°Eを示す。

カマドは東壁に設置され、埋土は焼土ブロック・焼土粒子混じりの褐色土であった。

ピットは1本検出された。深さ30cmで、位置的に貯蔵穴となる可能性がある。

出土遺物はカマド内から土師器環が1点検出されたのみである(第294図1)。おそらく丸碗形態の環と考えられ、口縁直下からヘラケズリが施されている。住

居の時期は不明確であるが、重複住居との関係から10世紀後半以前となることは確実で、土師器環が伴うとすると8世紀前半頃まで遡る可能性もある。

第46号住居跡 (第294図)

第46号住居跡は、A・B-17・18グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第45号住居跡を切り、第47号住居跡・第3号土壌に切られていた。北西コーナー一部は調査区外に延びている。

平面形は長方形で、規模は長軸4.98m、短軸3.66m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-98°Eを示す。床面はやや凹凸があるが、全体に堅く踏み固められていた。カマドは東壁の中央に設置され、第47号住居跡床面下から検出された。燃焼部は壁を切り込んで構築されていた。火床面は第3層下面と推定され、床面とはほぼ同一レベルで続く。火床面下部は若干掘り込まれ、掘り方が形成されている(第4層)。

ピットは8本検出された。住居使用時に開口してい

たのは Pit 1 のみと考えられる。Pit 1 は南西コーナー部に位置し、深さ37cm。カマド対向ピットと考えて良からう。Pit 2 はカマド右脇に位置し、貯蔵穴とも考えたが、上面に貼床が確認され、少なくとも住居廃絶時には埋め戻されていたことが確認された。他のピットは床面下から検出されたものである。

土壌は3基検出された。いずれもカマド前面の床面下から検出されたもので、床下土壌または掘り方の一部と考えられる。

出土遺物はロクロ土師器小皿・高台椀、羽釜、土師器環がある(第294図2~6)。第294図2・5はロクロ土師器小皿。底部は回転糸切り。4は高台椀。内面ヘラミガキ調整される。カマド内出土。6は須恵質の羽釜である。ロクロ整形されている。カマド内と床面の破片が接合した。住居の時期は10世紀後半と推定される。

第47号住居跡(第294図)

第47号住居跡は、B-18グリッドに位置する。重複する第46・48号住居跡覆土上面に床面が乗っていた。また、北壁部は第3号土壌に切られていた。掘り込みが極めて浅く、床面の遺存範囲を住居跡と認定したが、第46号住居跡の床を切って掘り込まれていたピットが本住居跡のカマド対向ピットと考えられることから、西壁は更に西に延びていたものと推定される。

平面形は長方形と推定され、規模は長軸4.20m(推定)、短軸2.65m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-107°-Eを示す。

床面はやや凹凸が顕著で、比較的強く踏み固められていたが、西半は削平され遺存しない。カマドは東壁の南端に設置される。燃焼部は壁を切り込んで構築されていた。先端は分割調査を行ったため削平されてしまい調査できなかった。底面はほぼ平坦で側壁は被熱していた。

ピットは2本検出された。Pit 1 は床面下から検出され遺構に伴うものではない。Pit 2 は重複する第46号住居跡床面を切って掘り込まれており、本住居跡に伴うカマド対向ピットと考えた。深さ42cm。

出土遺物はほとんどなく、Pit 1 から土師器環が1点検出されたに留まる(第294図7)。この環も本住居跡に直接伴うものではない。住居の時期は不明確であるが、住居形態や新旧関係から、10世紀後半~11世紀と考えて誤りなからう。

第48号住居跡(第294図)

第48号住居跡は、B-18グリッドに位置する。重複する第44・46・47号住居跡及び、第4号土壌に切られていたが、床面は遺存しており、遺構の全容は窺うことができる。

平面形は正方形で、規模は長軸3.73m、短軸3.48m、深さ0.20mを測る。主軸方向はN-42°-Eを示す。

床面は概ね平坦で、全体的に強く踏み固められていた。埋土はロームブロック混じりの黒褐色土単層で、人為的に埋め戻された可能性が高い。カマドは検出されなかった。おそらく当初より存在しなかったものと思われる。

ピットは1本西側コーナーに検出されたが、上面は貼床されており、柱穴として機能したのではない。また、土壌が1基床面下から検出された(SK1)。掘り方または床下土壌と思われる。

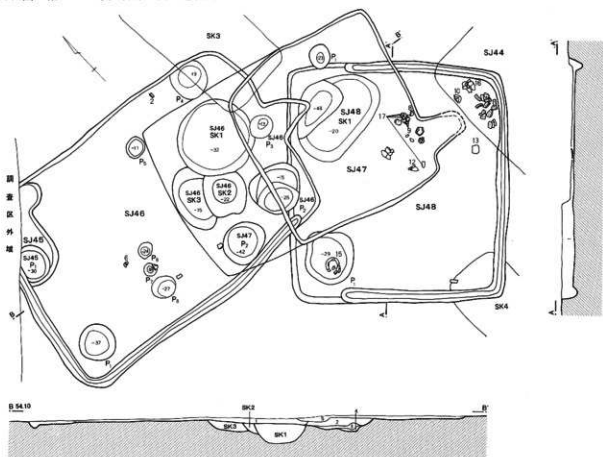
出土遺物は土師器環・甕・壺、羽釜がある(第294・295図8~17)。量的には少ないが、床面または床面近くから出土したものが大半である。第294・295図9・10・12・17は床面出土である。8・15・16は床面よりもやや浮いた位置から出土した。また、東側コーナーからは棒状の礫が14個まとまって出土した。編物石と考えられる。

第294図8~10は土師器環で、口縁部が短く内屈する北武蔵型環で、底部は丸底となる。14は土師器甕である。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部上端は横方向のヘラケズリで、器内を削り取っている。11・12・15~17は土師器壺である。羽釜(13)は混入と考えられる。住居の時期は7世紀後半~末葉頃と考えられる。

第49号住居跡(第296図)

第49号住居跡は、A-18・19グリッドに位置する。重複する第39・50・51号住居跡を切り、第36号土壌に

第294図 第45～48号住居跡・出土遺物(I)



SJ46

1 埴輪色土 ローム殻・ロームブロック多量、焼土粒散在

カマド

2 埴輪色土 白色粘土主体、焼土ブロック多量

3 埴輪色土 焼土殻・炭化物粒少量

4 埴輪色土 ローム殻・ロームブロック多量

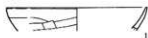
5 埴輪色土 ローム殻・焼土殻・ロームブロック少量

SJ48

1 黒褐色土 ローム殻・ロームブロック多量。(人為的埋め戻し)

0 2m

SJ45

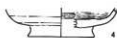


1

SJ46



2

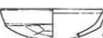


4

SJ47



7



3



5



6

(L/3)

SJ48



8



9



10



11



12

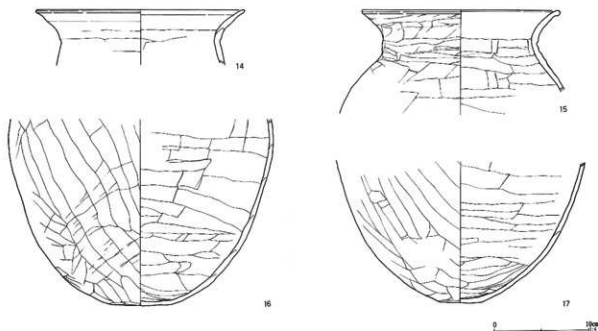


13

(L/20)

0 10cm

第295図 第45～48号住居跡出土遺物(2)



第136表 第45～48号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(15.0)	2.5		ADEH	1	橙	10	SJ45 カマド
2	小皿	(10.0)	2.8	(5.2)	BDEH	2	にぶい黄橙	25	SJ46 No.4 ロクロ土師器
3	坏	(11.0)	2.9		AEH	2	にぶい橙	10	SJ46 SK 1
4	高台筒		2.1		ADEH	2	橙	20	SJ46 カマド ロクロ土師器 内面ミガキ
5	小皿か		1.0	5.2	AEH	2	橙	95	SJ46 ロクロ土師器 底部回転糸切り
6	羽釜		9.9		CE I J	1	暗灰黄	5	SJ46 カマド No.3 須恵質 ロクロ整形
7	坏	(12.0)	3.0		ADEH	2	明赤褐	20	SJ47 Pit 1
8	坏	(9.8)	2.9		DEH	2	にぶい橙	25	SJ48 Na12
9	坏	11.2	3.3		EH	1	にぶい橙	75	SJ48 Na10
10	坏	13.7	3.8		DEH	1	にぶい橙	65	SJ48 Na16
11	壺		2.8	4.5	BH	2	橙	70	SJ48
12	壺		4.8	5.8	ADEH	2	にぶい褐	30	SJ48 No.4
13	羽釜		6.3		A E H J	1	橙	5	SJ48 Na17 土師質 ロクロ整形
14	甕	(22.0)	5.8		DEH	1	橙	10	SJ48
15	壺	21.0	11.6		DEH	2	橙	70	SJ48 No.2
16	壺		15.6	6.8	ADH	1	橙	30	SJ48 Na15
17	壺		15.0	4.5	CH	1	橙	40	SJ48 No.5・11

切られている。北壁部は調査区外に延びており、詳細は不明である。

平面形は方形糸で、規模は長軸2.70m、短軸1.84m(現在長)、深さ0.38mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。

倒木痕上に掘り込まれていたため、床面は黒色で、やや起伏がある。掘り込みは深い。カマドは検出されなかった。ピット・その他の付属施設も検出されな

った。

出土遺物は土師器坏・鉢・甕があるが、いずれも小片である(第297図1～9)。1・2・8は混入であろう。4～7の坏は底部平底形態で、4を除くと口縁部が外反気味となる。9の甕はいわゆる「コ」の字状口縁甕である。また、和泉期の高坏脚部片が出土している。住居の時期は9世紀前葉～中葉頃と推定される。

第50号住居跡 (第296図)

第50号住居跡は、A-19グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第49号住居跡に切られていた。また、第51号住居跡の床面下に位置する。住居北半は調査区外に延び詳細は不明である。

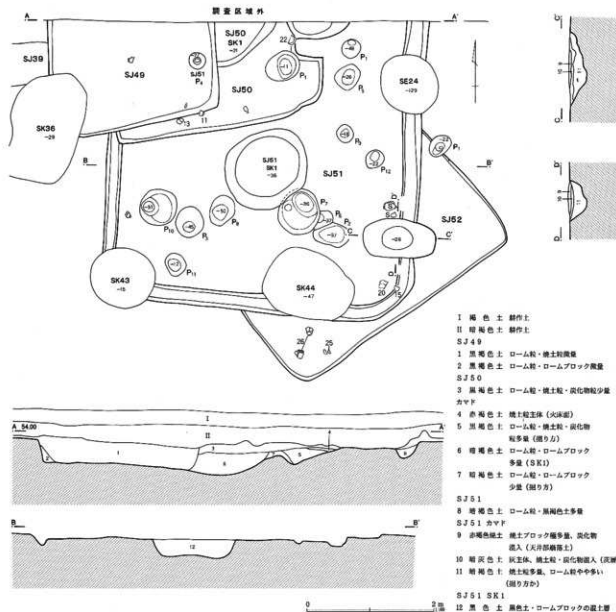
平面形は方形系と推定され、規模は長軸3.40m、短軸1.95m (現在長)、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-80°-Eを示す。

カマドは東壁に設置されるが、調査区外にかかるため詳細は不明。本住居跡に伴うピットは検出されな

った。その他カマド前面に土壁が1基検出された。上面に貼床されていたことから床下土壁と考えられる (SK1)。

覆土出土の遺物に関しては、当初本住居跡の存在に気付かなかったため、第51号住居跡出土のものか一部混在している可能性がある (第297図10~24)。本住居跡に伴う遺物は、第297図11・13の土師器環、23の土師器甕がある。土師器環は口縁部が内湾し、丸底形態のものである。土師器甕はカマド内から出土したもので、胴部縦ケズリ調整される鬼高系の甕である。住居の時

第296図 第49~52号住居跡



期は7世紀後半～末葉前後と考えられる。

第51号住居跡 (第296図)

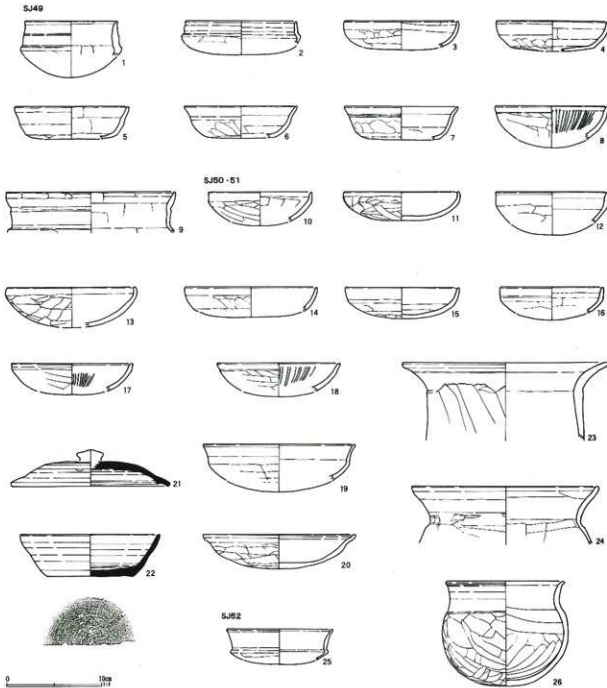
第51号住居跡は、A・B-19グリッドに位置する。北壁部は調査区外に延びている。掘り込みが浅いためほぼ床面まで耕作が及び、遺構の遺存状態はあまり良くない。重複する第50・52号住居跡を切り、第49号住居跡、第43・44号土塼、第24号井戸跡に切られてい

た。

平面形はやや横長の長方形になるものと推定され、規模は長軸4.96m、短軸4.74m(現在長)、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-94°-Eを示す。

床面はほぼ平坦で全体に堅く踏み固められていた。カマドは東壁の南寄りに設置されていた。遺存状態は極めて悪く、袖部は全く遺存していなかった。第10層

第297図 第49～52号住居跡出土遺物



第137表 第49～52号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	鉢	(9.8)	3.6		ADE	1	にぶい褐	5	SJ49
2	坏	(11.6)	2.3		DEG	1	にぶい黄褐	5	SJ49
3	坏	(12.0)	2.7		EG	1	橙	10	SJ49
4	坏	(11.8)	3.2		BDEG	1	橙	30	SJ49
5	坏	(12.0)	3.4		DEG	2	橙	10	SJ49
6	坏	(12.0)	3.3	(6.2)	BCDE	1	橙	20	SJ49
7	坏	(12.0)	3.4		BEG	1	にぶい橙	20	SJ49
8	坏	(12.0)	3.5		ABDE	2	明褐	10	SJ49 内面放射状暗文
9	甕	(17.8)	4.4		ADEG	2	橙	5	SJ49 カマド
10	坏	(11.0)	3.1		ADEH	2	にぶい橙	20	SJ50・51 床下
11	坏	12.2	2.9		BDH	1	橙	60	SJ50・51 Na7
12	坏	(12.0)	3.3		EG	1	明赤褐	15	SJ50・51
13	坏	(13.6)	4.2		BDH	1	橙	25	SJ50・51 Na6
14	坏	(14.0)	2.5		ADEG	2	にぶい赤褐	5	SJ50・51 SK1
15	坏	(12.0)	3.3		ADEJ	2	橙	60	SJ50・51 Na10
16	坏	(11.0)	2.7		DEG	2	にぶい橙	13	SJ50・51
17	坏	(12.8)	2.9		EG	2	橙	5	SJ50・51 内面放射状暗文
18	坏	(13.0)	2.9		ADE	1	橙	10	SJ50・51 内面放射状暗文
19	坏	(16.0)	3.8		EH	2	にぶい橙	10	SJ50・51
20	皿	(16.0)	3.6		ABCDH	1	明赤褐	40	SJ50・51 Na9
21	須恵蓋	(17.0)	2.6		EI	1	灰	15	SJ50・51 末野産
22	須恵坏	(14.8)	4.5	9.6	BH1	1	灰黄	50	SJ50・51 Na3 末野産 底部+体部下端ケズリ
23	甕	(22.0)	8.2		ADEJ	1	橙	20	SJ50・51
24	甕	(19.8)	6.3		ADEG	1	にぶい赤褐	5	SJ50・51
25	坏	(11.2)	3.2		AEG	2	橙	5	SJ52 Na4
26	小型壺	12.4	11.0		ADH	1	橙	70	SJ52 Na2

が灰層で、その下部は埋め戻されていた(掘り方)。

ピットは12本検出されている。Pit 1～4は主柱穴となる可能性がある。他にも深いピットはあるが、帰属は不明確である。

土壌は1基、住居中央付近から検出された。上面に貼床が施され、住居に伴う床下土壌と考えられる(SK1)。

出土遺物は、重複する第50号住居跡と一部混在している可能性がある(第297図10～24)が、大半は本住居跡に伴うとみて良い。第297図15の土師器坏、20の土師器皿、22の須恵器坏、21の須恵器蓋は本住居跡に伴う。21の須恵器蓋は末野産である。22の須恵器坏も末野産。体部下端と底部は回転ヘラケズリ調整され、底部は平底風となる。内面の底部周縁部には沈線が巡る。住居の時期は8世紀初頭～前半と考えられる。

第52号住居跡(第296図)

第52号住居跡は、A・B-19グリッドに位置する。

確認段階で既に床面が露出していた。重複する第51号住居跡に切られており、遺構の遺存状態は悪い。

平面形は方形系と推定され、規模は長軸4.14m、短軸2.22m(現在長)、深さ0.03mを測る。主軸方向はN-56°-Eを示す。

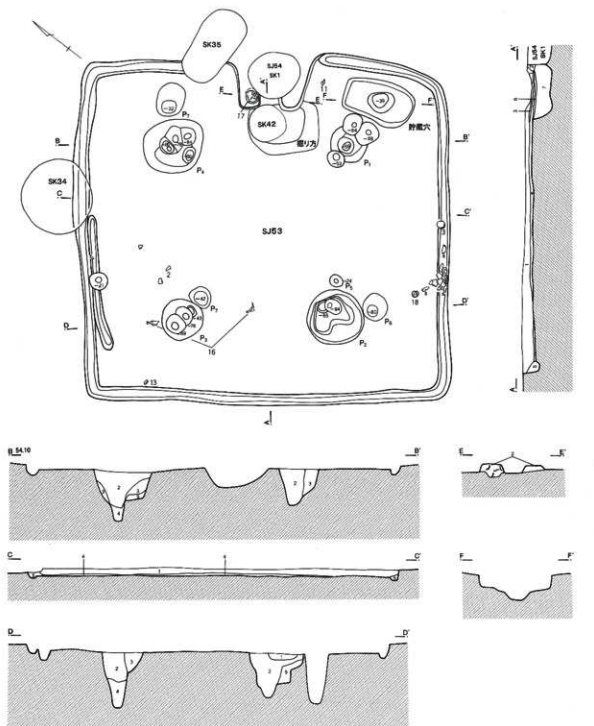
床面は平坦である。カマドは検出されなかった。ピットは壁に掛かって1本検出されたが、伴うものではない。

出土遺物は少なく、土師器坏(第297図25)と小型壺(26)が床面から出土した。土師器坏はいわゆる模倣坏であるが、口径は縮小している。小片である。住居の時期は不明確であるが、7世紀前半代を中心とした時期と推定される。

第53号住居跡(第298図)

第53号住居跡は、B-18・19グリッドに位置する。覆土上面に第54号住居跡が乗っており、第54号住居跡の床下土壌がカマド燃焼部を切って掘り込まれていた。

第298図 第53号住居跡

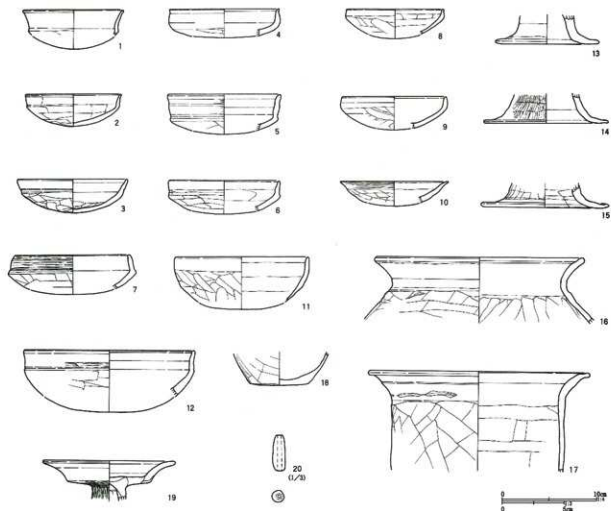


- 1 暗褐色土 ローム粒・赤色粒・ロームブロック少量
 2 暗褐色土 焼土粒・粒状になった白色粘土多量（カマツ）
 3 黒色土 焼土粒少量（灰層）
 4 黒灰色土 ローム粒・焼土粒・白色粘土多量
 住居跡中央部を中心に部分的に敷り直した床面（第一床面）
 5 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
 6 黒色土 焼土粒少量（灰層）第一床面下の住居跡カマツ灰層

- 7 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量・焼土粒・炭化物少量（掘り方）
 SJS33 ビット
 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土ブロック・焼土多量
 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
 4 黒色土 ローム粒少量
 5 黄褐色土 ロームブロック・黒褐色土多量

0 5m

第299図 第53号住居跡出土遺物



第34・35号土壌は本住居跡を切っていた。また、第42号土壌は本住居跡カマド前面の掘り方と考えられる。

平面形は正方形で、規模は長軸6.03m、短軸5.50m、深さ0.10mを測る。比較的大型の住居跡である。主軸方向はN-53°-Eを示す。

床面は平坦で、カマド前面と柱穴ラインの内側が堅く踏み固められており、壁際の部分は全体に軟弱であった。

カマドは北東壁のほぼ中央に設置されていた。燃焼部は壁の内側におさまるが、その中央部を重複する第54号住居跡の床下土壌によって破壊されていた。袖は白色粘土を用いて構築されていた。左袖には土師器甕が倒立状態で埋設されていた。カマド袖部の補強材と考えられる。

ピットは8本検出された。Pit 1～4はいずれも深く規則的に配置されることから、主柱穴と考えられる。また、Pit 6・7もその一部となるかもしれない。各柱穴とも3～4本複合しており、数度にわたって建て替えた可能性があらう。

貯蔵穴はカマド右側のコーナー部に設置されていた。楕円形で長径1.15m、深さは0.39mである。

壁溝はカマドの周囲を除き全周する。北西壁では部分的に2本検出され、建て替えの跡を示すものと思われる。

出土遺物は土師器・高環・皿・甕・壺、土錘がある(第299図)が小片が多い。第299図3の土師器環は南東壁の壁溝内にかかる位置から出土した。完形品である。その南側には細物石が8個、床面から壁溝内に

第138表 第53号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(10.6)	2.7		DEH	2	オリーブ黒	10	
2	環	(10.0)	3.4		DEH	2	橙	25	№5
3	環	11.6	3.5		DEH	1	橙	100	№9
4	環	(11.6)	3.8		DEH	1	橙	10	比企型環 内面赤彩
5	環	(11.8)	3.8		DEH	2	にぶい橙	5	床下
6	環	(11.6)	3.2		AEH	2	明赤褐	25	床下
7	環	(12.0)	3.6		ADEH	2	明赤褐	25	
8	環	(10.2)	2.6		DEH	2	橙	20	
9	環	(10.9)	3.3		ADEH	2	にぶい黄橙	10	
10	台付皿?	(11.4)	2.2		DH	1	橙	20	床下
11	環	(14.0)	4.7		ADEH	1	橙	30	№8
12	環	(17.9)	4.8		DEH	2	にぶい橙	10	床下
13	高環		3.1	(11.0)	AE	2	にぶい赤褐	40	№1
14	高環		3.1	(13.2)	AEH	1	明赤褐	10	
15	高環		2.5	(13.6)	AE	1	明赤褐	25	振り方
16	甕	(22.2)	6.8		ADEH	1	橙	40	№6・7 Pit 3
17	甕	23.6	10.4		ADH	1	橙	60	カマド 左袖内
18	甕		3.5	6.2	ABDEH	2	にぶい褐	70	№10
19	高環	(14.0)	4.3		AE	1	明赤褐	25	振り方
20	土鉢	長2.8cm	最大径1.0cm	孔径0.25cm	重量2.49g		にぶい赤褐		Pit 4

かけてまわって出土している。17の土師器甕はカマド左袖内出土である。

第299図1～9・11・12は土師器環。1～3・6は蓋環模倣環である。7は環身模倣環。5は有段口縁環である。4は比企型環で、内面に赤彩痕が残る。8・9は北武蔵型環である。10は小型の皿または台付皿であろう。高環(13～15・19)は混入か。住居の時期は7世紀前半～後半頃と推定される。

第54号住居跡 (第300図)

第54号住居跡は、B-19グリッドに位置する。第53-55号住居跡の覆土上面に構築され、第35号土壌に切られていた。

確認面で既に床面まで達しており、平面形は方形系と推定されるが不明確であった。図化したラインは床面遺存範囲と出土遺物から追った推定ラインである。

規模は不明とせざるを得ない。

床面は部分的に遺存するのみである。カマドは削平されており検出できなかった。ピットは検出されなかった。

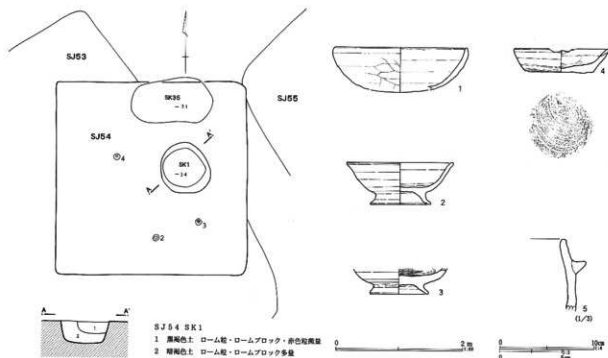
土壌は1基検出された。円形プランで直径85cm、深さ35cm。上面には貼床面が残る、住居に伴う床下土壌と考えられる。

出土遺物は土師器環、ロクロ土師器小皿・高台椀、羽釜がある(第300図)。第300図1の土師器環は混入である。2・3はロクロ土師器高台椀。2は小振り。3は内面ヘラミガキが施され、やや黒ずんでいることから黒色処理が施された可能性がある。いずれも胎土に片岩を含んでいる。4はロクロ土師器小皿である。口唇部を一部(故意に?)欠いている。扁平な皿形の器形で、底部は回転糸切り。5は土師質の羽釜である。

第139表 第54号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(14.0)	4.4		BDEH	2	橙	10	
2	高台椀	11.2	4.4	6.3	ADEH I	1	橙	95	№3 ロクロ土師器
3	高台椀		2.7	(6.0)	BDEH I	1	橙	70	№2 ロクロ土師器 内面ミガキ
4	小皿	10.0	2.5	7.2	ADH	1	橙	100	№1 ロクロ土師器 口縁の一部欠損
5	羽釜		5.5		DEH	1	にぶい赤褐	5	土師質 非ロクロ整形 割部タケヅリ

第300図 第54号住居跡・出土遺物



非ロクロ整形で、胴部は縦方向のケズリ調整がなされている。住居の時期は10世紀後葉～11世紀初頭と考えられる。

第55号住居跡 (第301図)

第55号住居跡は、A-20、B-19・20グリッドに位置する。縄文時代の第1～3号住居跡を切って構築され、第7・10号井戸跡に切られていた。また、東コーナー部覆土上面には第56号住居跡が乗っていた。床面を除去したところ、壁の内側に更に壁溝が二重に巡ることが確認され、2度の建て替えを経ていることが判明した。最終段階の住居跡を55a、その内側の壁溝に対応する住居跡を55b、最も内側の壁溝に対応する住居跡を55cとそれぞれ呼称する。55bと55cの先後関係は不明確であるが、おそらく最も小規模な55c→55b→55a号住居跡の順に拡張したものと推定される。

第55a号住居跡の平面形は正方形である。規模は長軸6.50m、短軸6.40mの大型住居跡で、深さ0.29mを測る。主軸方向はN-31°-Wを示す。

床面は概ね平坦である。Pit 1-Pit 2ラインと Pit 3-Pit 4ラインの内側が強く踏み固められていた。

特にカマド前面の部分は非常に強く締まっていた。逆にピットを結ぶラインの外側、壁際の部分は全体に軟弱であった。

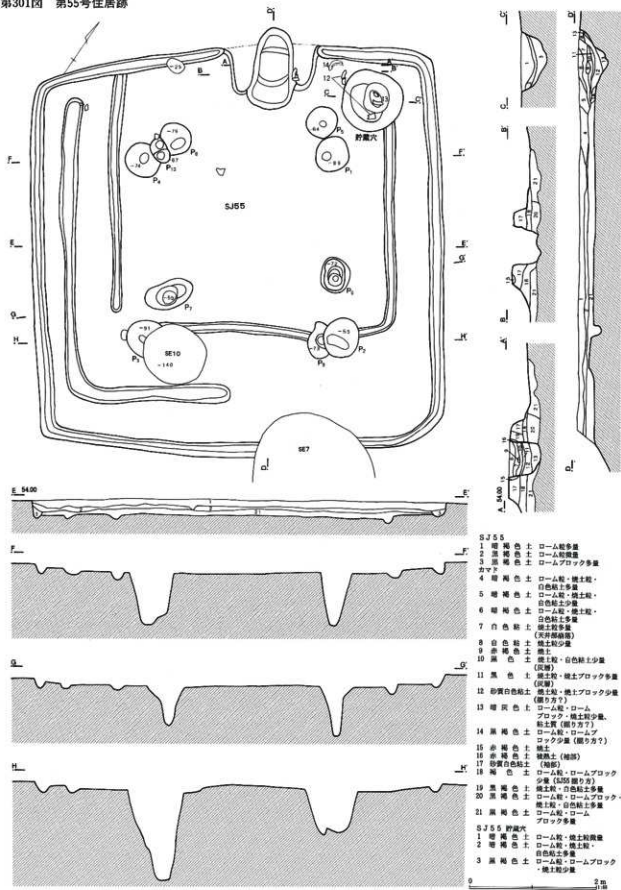
カマドは北壁の中央からやや東寄りに設置されている。先端部が僅かに壁を切り込むが、焼燃部の大半は壁内におさまる。袖は白色粘土を積み上げて構築されているが、カマドの周囲に白色粘土が多量に流れ出していた。底面は床面下に掘り込まれているが、使用段階には埋め戻され(第12～14層)、火床面は第10～11層下面に相当する。

支柱穴はPit 1～4が相当する。重複するPit 9・10も含めて建て替えを考える必要があるが、いずれにせよ4本支柱穴構成と考えて良い。各ピット共に、支柱とするに十分な深度をもっている。

貯蔵穴はカマド右脇のコーナー部に設けられていた。円形で規模は直径95cm、深さ43cmである。覆土中層にはカマドに由来する白色粘土が流れ込んでいた。壁溝はカマドを除き全周する。

第55b号住居跡は、西壁から南壁にかけて鍵の手状に壁溝が屈曲する。北壁と東壁は第55a号住居跡と共に有したものと推定される。

第301図 第55号住居跡

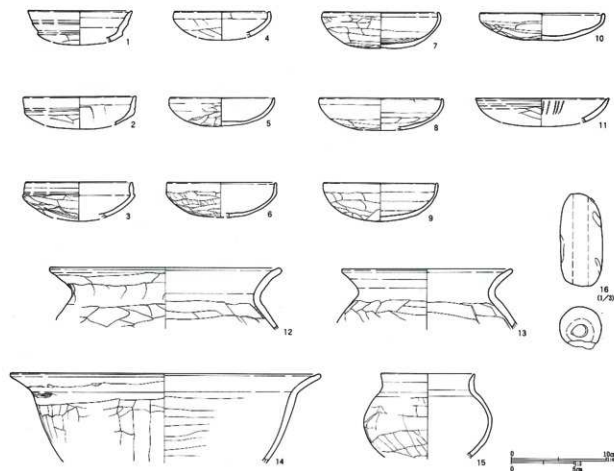


大寄Ⅱ区

平面形はやや横長の方形で、規模は長軸6.12m、短軸5.60mである。主軸方向は第55a号住居跡と変わらず、N-31'-Wを示す。

床面は第55a号住居跡を造成する際に削平されていた。カマドは遺存しないが、第55a号住居跡と同一地点に設けられていたものと推定される。

第302図 第55号住居跡出土遺物



第140表 第55号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.0)	3.3		AEH	2	黒褐	10	
2	坏	(11.8)	3.0		DEG	2	にぶい黄褐	10	
3	坏	(11.3)	3.7		AD	1	にぶい橙	30	床下
4	坏	(10.0)	2.7		DEH	1	にぶい褐	20	黒斑
5	坏	11.0	3.0		DH	1	橙	70	
6	坏	(11.5)	3.6		ADH	1	橙	25	床下 黒斑あり
7	坏	(12.2)	3.8		DEH	1	にぶい橙	25	
8	坏	(13.0)	3.3		ADEH	2	にぶい橙	25	
9	坏	(12.0)	4.0		ADEH	2	にぶい赤褐	30	
10	坏	(13.1)	2.8		DEH	1	明赤褐	25	貯蔵穴
11	坏	(14.0)	2.5		ADEHJ	2	橙	10	内面放射状暗文
12	壺	24.6	6.5		DH	1	橙	80	No.2
13	壺	(18.0)	6.4		BDH	1	にぶい赤褐	35	No.4
14	甕	(33.0)	9.3		H	1	にぶい赤褐	20	No.1・2 確認面
15	小型甕	(10.0)	8.8		DH	1	にぶい褐	25	床下 外面被熱
16	土錘	長7.2cm	最大径3.3cm	孔径1.2cm			重量81.66g	橙	

主柱穴も第55a号住居跡とはほぼ同一地点に掘り込まれたものと思われ、4本主柱穴構成を採った可能性が高い。

第55c号住居跡は、最も内側に位置する住居跡で、壁溝が西壁から南壁、東壁にかけて巡っている。北壁は第55b・55a号住居跡と共有したものと考えられる。

平面形は正方形で、規模は長軸4.65m、短軸4.58m、主軸方向はN-31°-Wを示す。

床面は拡張する際に削平されていた。カマドは存在せず、おそらく第55a号住居跡カマドと同一箇所に存在したものと推定される。

本住居跡に伴う柱穴は、Pit 5～8が対応するものと考えられる。4本主柱穴構成で、深さも59～79cmと深い。第55a・55b号住居跡の柱穴よりもやや北側に寄り、柱間も短くなっている。

第55号住居跡から出土した遺物には土師器環・壺・小型甕・甔、土鍾がある(第302図)。住居規模に比して遺物量は少なく全て破片である。

第302図1～3は小型の模倣杯、4～10は北武藏型杯である。11は内面に放射状暗文を施す杯。12・13は壺、14は甔または鉢か?。16は大型の土鍾である。3・6・15は第55a号住居跡の床面下から出土した。その

他は第55a号住居跡に伴う遺物と考えられる。住居の時期は7世紀中葉～7世紀末葉乃至8世紀初頭頃にかけて順次建て替えられたものと考えられる。

第56号住居跡(第303図)

第56号住居跡は、B-20グリッドに位置する。第55号住居跡の覆上上面を僅かに切って構築される。また、住居南東コーナー部は第25号井戸跡に切られていた。

平面形は長方形で、東壁北端に半円形の張り出し部が設けられていた。規模は長軸5.60m、短軸3.38m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-96°-Eを示す。

床面は概ね平坦で、全体に堅く踏み固められていた。カマドは検出されなかった。おそらく住居東壁南端に設けられていたものと思われ、第25号井戸跡によって削平された可能性が高い。

ピットは5本検出された。Pit 1は南西コーナー付近に位置し、深さ45cm。住居に伴うカマド対向ピットと考えられる。Pit 2は深さ11cmの小穴であるが、内部に灰と焼土が詰まっており、カマド脇に併設された灰溜め状ピットである。Pit 3～5は住居に伴うものではない。

土壌は3基検出された。1号土壌は西壁北端部に位置し、壁ラインに沿って掘り込まれていた。形態は長

第141表 第56号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	小皿	(9.0)	2.3	(5.4)	BDE	3	にぶい赤褐色	20	ロクロ土師器
2	小皿	(8.8)	2.2	5.4	DHJ	2	橙	70	No.20 ロクロ土師器
3	小皿	(9.0)	2.5	(5.8)	AE	2	黒褐色	15	ロクロ土師器 内外面黒色
4	小皿	10.3	2.8	5.2	DEH	1	灰色	90	No.4 ロクロ土師器
5	小皿	(9.8)	2		BCDE	2	橙	35	ロクロ土師器
6	小皿		0.9	(6.0)	AE	2	にぶい橙	20	Pit 1 ロクロ土師器
7	杯	(10.0)	3.6		DEH	2	にぶい褐色	25	No.7
8	高台碗	(13.0)	4		AE	2	にぶい赤褐色	15	Pit 1 ロクロ土師器 ロクロ土師器 内面ミガキ
9	高台碗	(13.0)	2.6		EJ	2	にぶい赤褐色	30	ロクロ土師器
10	高台碗	13.6	3.5		H	1	にぶい赤褐色	80	ロクロ土師器
11	高台碗		3.7	(8.4)	ADEJ	2	橙	30	Pit 1 ロクロ土師器
12	須恵盤	(22.0)	2.5		EJ	2	灰黄	10	末野産か
13	壺		4.3		BDH	1	灰褐色	35	No.21
14	羽釜	(22.0)	9.0		ADEJ	1	にぶい橙	20	No.2 土師質 ロクロ整形
15	羽釜	(20.0)	15.2		BEIJ	2	明赤褐色	15	No.8 土師質 非ロクロ整形 胴部タテケズリ
16	土鍾	長3.95cm	最大径1.15cm	孔径0.35cm			重量4.45g		灰褐色
17	土鍾	長3.65cm	最大径1.2cm	孔径0.3cm			重量4.16g		にぶい黄橙
18	土鍾	長(3.3)cm	最大径1.2cm	孔径0.25cm			重量2.55g		灰褐色
19	土鍾	長3.1cm	最大径1.15cm	孔径0.25cm			重量3.39g		にぶい黄橙